

魔法先生ネギま！～消えたもう一人の御子～

香坂美幸希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目をあけると、そこに広がるのは、木、木、木。

変な術式が起動する前に、姉さんが逃がしてくれた

私はひたすらに走り続けた

大きな扉を開けると不思議な機械があった

そこから先は覚えてない

私、これからどうなってしまうのだろうか…

目次

1時間目「選択」	1
2時間目「学舎」	7
3時間目「移動」	10
4時間目「初授業」	18
5時間目「歓迎」	31
6時間目「偶像」	37
7時間目「序章」	43
8時間目「露見」	50
9時間目「諦念」	58
10時間目「勉強」	64
11時間目「鍛練」	68
12時間目「部活」	73
13時間目「勧誘」	77
14時間目「入浴」	81

1 時間目 「選択」

「アスナ！ ミズキ！ 何処だ!!」

「ナギ！ アスナ嬢ちゃんはいたが、ミズキ嬢ちゃんがいねえ！」

「なんだと!?! ミズキ!! 何処だ!」

「ナギ、もう時間がありません。ここももうじき崩れます、諦めましょう…」

「ふざけんな、アル！見捨てられっかよ！

おいコラ、ジャック離しやがれ!!」

ナギと呼ばれた青年はジャックと呼ばれる大男に後ろから抱えられる

「ナギ、見捨てられないのは皆同じだ！

だが、何処にも見つからないのもまた事実、アルの探査にかからないのだ」

「くそ…くそ！ チクシヨーーー!!!」

「ううん…」

少女は目覚めた、見渡してみれば周りには木が生い茂っている

「ここは…どこだろう…」

少女は考えるが今一つ頭が働かずともな答えも出てはこなかった

ガサガサツ

「っ！…」

突然に木々の隙間の草が揺れる。少女は怪訝そうにそちらを見つめる

「んっ？…こんなところで何をしているんだ？」

草から出てきたのは綺麗な蒼い髪をした女性だった

「ん、気付いたらここにいた」

「…言葉が通じないな、あちらも何か喋ったのだからこちらの言葉は分かっている…か？」

少女よ、こちらの言葉が分かっていたら頷いてくれないか？」

私はこくりと頷いた

「こちらの言葉は分かるか…ますますわからんな

見たところ日本の生まれではないようだ

アメリカ、ロシア、イギリス、これらに聞き覚えは？」

「アメリカ？ロシア…イギリス…イギリスの…ウエルズ？」

「イギリスのウエルズか、のどかな場所だな…君の故郷か？」

私は首を横に振る

なんとか身振り手振りで聞いたことがあると示した

「聞いたことがある…か

君は自分の住んでいた場所に帰りたいか？」

私はまた首を横に振る

「そうか、なら私と一緒に暮さないか？」

今度は首を傾げる

「分からないって顔だな、何、お前が心配になっただけさ

それに私はいつも一人で寂しいんだ、ダメか？」

少し考えた後、私は首を振る

「そうか、私の名前は風鳴 翼だ、よろしくな」

「ミズキ・ウエスペルタティア・テオタナシア・エンテオフュシア」

「…名前か、よろしくなミズキ」

こくんと頷いて答える

「私の家に着いたらミズキにはこちらの言葉を覚えてもらおう、今のままだと会話にならないからな」

私は立ち上がり風鳴さんに着いていく

二人並んで歩いて数十分たったころ開けた場所に小さなログハウスが建っていた

「着いたぞ、一通り物は揃っている、苦勞することはないだろうが…。服はすまないが替えがない、一先ずは私のを着ていてくれ」

玄関らしき扉を開け中に入る

「家の中では靴を脱いでくれ、日本の風習でな」

靴を脱いで家にかかる

「日本の文字を読み、書けるようになってもらおうと思う、紙さえあれば意思の疎通が出来るようになるからな」

風鳴さんは白い紙に文字を書き始めた。

70字前後だろうか

「これが日本における基本の文字、平仮名だ」

くねくねした文字が埋まっていた

翼さんは一文字づつ読みあげる。

私も真似をして読んでいく

「そうだ、いい感じだ、一度、君の心を書いてくれないか

君の思っていることを一文字づつ平仮名で書いてくれ」

私は今どんな状況なのか分からないから『ここはどこ』と書いた

「ここはどこ、か

ミズキは場所が気になっているととらえるぞ?」

私は頷く

「ここは埼玉県の中心から少し外れた山の中だ

空気が澄んでいてとても落ち着くだろう?」

二度頷いた後、今度は別の文字を書き始める

『わたしのことをおしえる』

「ミズキの事を教えてくれるのか、どんどん教えてくれ」

『わたしわ せかいひとつを けすことができる』

「世界一つと来たか」

『わたしが めざめるまえわ せかいをほろぼす すんぜん だった
わたしの あねが にがしてくれた』

翼さんは何も言わず真剣に言葉を読んでいく

『だから わたしわ いきていてわ いけな「それ以上書くな!」』

その声に思わず顔をあげてしまった。

翼さんの顔を見てしまった

私にはわからない、感情がなくなった私には、その今にも泣きそうな翼さんの顔の意味がわからない

「ミズキ、お前は生きていてはいけない？」

そう言いたいのか？

ホントにそんな事を思っているのか？

お間が死んでしまったらミズキを逃がしてくれた姉の思いはどうなるんだ？

生きていてほしいから、お前を逃がしたのではないか？」

「わ、たし、にわ、へいき、として、しか、かちが、なか、た。」

「そんなことはどうでもいい、今のお前は私の家族だ、娘だ

人の価値なんて、それだけでいい、それだけで価値になるんだ」

「でも、わたしわ、つばさ、さん、の、むすめ、じゃな、い」

「ミズキが私と共に暮らすことを領いた、それだけでもう、私の家族で、娘だ」

「…」

何も言えない、そんな言葉を貰ったことはなかったから…

でも…

「なぎ、も、わたしにわ、やさしく、して、くれた」

「なら、そのナギって人も君を一人の子供として見ていたんだろう

子供の価値は、そこにいるだけでいい」

『アスナとミズキな

よし待ってろ、お前らなんていらねえ、俺らで全部片付ける。

子供は子供らしく、おとなしく待ってな』

わからない、感情のないただの人形の私には、瞳から流れるこの水

の意味が、分からない

「…感情がない、なのにどうして涙が溢れるのか…それは、嬉しいからだ」

「…わか、らない」

「大丈夫、これから分かっていけばいい、焦る歳じゃないだろう?」

「…うまれ、てから、せい、ちよう、してない。

かぞえ、るのも、お、くうな、くらい、わたした、ちわ、いきた」

「…え?なに?30は過ぎたのか?」

「ごじゆ、うわ、こえてた、ひやくわ、いつてない、とお、もう」

無表情のままだが手の指を5本立てて翼さんに向ける

「もう、驚かないな、今なら神鳴流ですら倒せそうだ」

神鳴流と聞いて私は紙に書き綴る

『しんめいりゆう しりあい いる』

「神鳴流に知り合いがいるのか、今度紹介してくれ」

『ばしよ しらない でも きようとにすんどると きいた』

「よし、ミズキが一人前の人間になったら行こうか」

私は頷き「たのし、み」と呟いた

「よし、そうと決まれば、修行に行くぞ!」

何の修行か分からず首を傾げる

「私の修行だが、もちろんミズキもやってもらう

むしろミズキが神鳴流を倒すのも面白いしな」

ますます訳が分からない

深く顔を傾ける

「ミズキはこれから剣術を学んでらう

そして、日本における基礎的な文学も学んでもらって、立派に育てる

一人前な私の娘にな!

これからミズキは名を聞かれたらこう答えろ。

『風鳴 瑞樹』と」

紙に風鳴瑞樹、上にかざなりみずきと書いた

「かざなり、みずき…」

私の新しい名前、兵器としてのミズキではなく、家族としての瑞樹

「よし、行くぞ！」

まずは基礎体力作りからだ！」

「お〜」

一人前の人間として…これから先、成長するかも分からない私を育ててくれる翼さんの恩返しの為に…強くなろうと私は決意した…

2 時間目 「学舎」

朝、陽が昇る頃、私は目を覚ます。

軽く身支度を整え、道着に着替え外に出る。

準備運動をし、ランニング。

山頂まで走り、山頂の倉庫から翼さんからもらった愛刀「天斬」を取り出し奥義の型を繰り返し放つ。終わると次は倉庫から先端に15kgの重りを付けた鉄製の棒を出し素振りを繰り返す。30分の精神統一の後、獲物を捕えるため山を駆け巡る。夜明けと日没に同じことを繰り返す。

だから、兵器として生きてきたあの日々より…山の中にとどまった閉鎖的な世界のほうが生きてるって感じているのだろうか…

翼さんがここを出て三年、指示された練習メニューを上方修正して、また明日。

いつたい…いつまで続ければいいのか…

なんで…翼さんは戻ってこないのだろうか…

どうして…響さんもクリスさんも様子を見に来てくれないのだろうか…

決まってる…みんな死んだから…

いつの時代も帰ると約束した人は大概帰らない、人生なんてそんなものだ…

何も変化のない毎日…でも、今日は違うみたい、今日だけはいつもの毎日から少し外れるみたい……来客だ

翼さんでも響さんでもクリスさんでもない、新しい人…

私は玄関を開け外に出る、そして先ほどから木の陰で身を隠している男に殺気を放って問いかける

「問う、あなたがここに来た理由は何？」

「…」

「場所は分かってる、隠れてないで出てきたらどう？」

男は白いスーツに無精ひげを生やした翼さんと同年代くらいで同等の気を持つてる。油断は出来ない

「もう一度問う、あなたがここに来た理由は？」

「…ふう、ただの調査さ、ここの麓の村の人に山頂から光と甲高い音が聞こえるから調べてほしい、てね」

「それは…申し訳ありませんでした、私の配慮が足りないばかりに…」
「何をしていたんだい？」

「剣術です、私の使う流派に該当する技があるので確かです」

抜刀による閃光と高音の堺に敵を切りつける、風鳴流抜刀奥義 輝
光閃

「そんな流派は聞いたことがないな…」

「先代…私の母が新たに作り上げた流派だと聞いています」

「なるほど、これから頭角を現せてくるわけか…」

ところで、君のお母さまは？

年齢的には中学生程度だろうか？

「…三年前から帰って無いですよ」

「それは…すまないことを聞いた」

「別にいいですよ、帰ってこないのはどこかで死んでいるからでしょう…昔からそれは変わらない…」

「…ここで一人で暮らすのもあれだろう、私の勤めている学園に来ないかい？」

この人も私を普通の子供として見てるのかな…

でも、新しい生活にあこがれてたし、付いて行くだけ付いて行こう。合わなければ帰ればいいし、もし翼さんが帰ってきてても書置きを残しておけば気づくだろう。

「…いいですよ、なんていう学園なんですか？」

「ああ、麻帆良学園…の君なら女子中等部に編入することになるだろう、年は？」

「(翼さんと会ったのが八年前、肉体年齢が六歳前後だから)……14です」

「なら、二年生だね、きつとA組になると思う、僕がその担任だから

ね」

「分かりました、身支度を整えます。時間がかかりますが中でお待ちになりますか？」

「いや、構わないよ、学園長に連絡しないといけないからね」

「分かりました…申し遅れました、私は風鳴 瑞樹と言います」

「ああ、僕はタカミチ・T・高畑、タカミチでいいよ」

「それでは、タカミチさん、これからよろしくお願いします」

私はお辞儀をした後家に入り、荷物をまとめる、と言っても持つていく物は道着袴と木刀、竹刀袋二枚に山頂から天斬くらいだろう

いや、もうひとつ…

「それを着て移動するのかい？」

「私の唯一の私服です、何か問題でも？」

「特には無いが、動きにくくないかい？」

「慣れました」

私の唯一の私服、翼さんが子供のころに使っていた和服。

蒼を基調とした睡蓮の刺繍が施された貴重な一点もの。

翼さんと同じ青い髪の私に合うと持つてきてくれたものだ。

「では、行きましょう」

「そうだね、山道の中に車があるからそこまで歩くよ」

「ええ、大体どのあたりか、検討はつくので」

私は第二の故郷を離れる、肌寒くなってきた11月下旬、翼さんと過ごしたこの家…必ず、帰ってくるから…待つていてね…

私は小さく見える我が家に振り返り、一礼…「…行つてきます…」

必ず帰ると…どこかで死んでしまっているであろう翼さんと共に、必ず…

私は八年間お世話になった家を後にした…

3時間目「移動」

「さあ、着いたよ、ようこそ麻帆良学園へ」

電車を降りて駅のホームを潜るとそこには魔法世界の都市と似通った街並みが見える。山の中では見る事の出来なかつた世界。

ここに来るまでも世界は変わったように感じていたがまた変わった気がした。

「これから学園長がいるところまで案内するよ。」

「はい。」

タカミチさんのものだろう箱型の乗り物：おそらく車であろうそれに乗り中心部を目指していく

「ここでは車より速く走れる生徒がいるんですね？」

何かやってるようには見えませんが…」

「それを含めて着いたときに説明するよ」

タカミチさんは苦笑いしつつ応えた

良かった、この乗り物は車で会ってたか…

「着いたよ、ここが麻帆良学園女子中等部の校舎だよ。ここに学園長がいらっしやる。」

「…男子生徒が学園長を訪ねた際は奇異の視線を浴びそうですね？」

「…そこは関係ないから言明は避けておこうかな。」

そんな会話をしつつ何の問題もなく『学園長室』と書かれた部屋に辿り着く

コンコンコン

「高畑です、件の少女をお連れしました。」

「入ってよいぞ。」

「失礼します。」

声をそろえて言いタカミチさんはドアを開ける

「ふおっふおっふお、待っておったぞい」

声をかけられているがそんな事が気にならない程に私は驚愕する

…

何故…

「何故ここにぬらりひよんがいる!？」

「……」

くうっ!流石に私でも当てられるかわからない!!

「動くな!動けば斬るッ!」

「ふお!?ま、待つんじや瑞樹君」

「忠告はしたぞ!はあ!!」

そして学園長の後ろに回り抜刀一閃

「ふお?」

「くっ…やはり外したか…すばしっこい奴め…」

「み、瑞樹君…今のは?」

タカミチさんと学園長が呆けたようにこちらを見ている

「…ああ、山の中で時々現れる妖怪を狩っていたんです、鍛錬の要領です
すね。

中級程度ならば狩れるのですが流石に最上級となると当てる事さ
え難しいですね」

「そうか…てつきりわしの事かと…」

「?学園長が?」

失礼ですが後頭部以外に似ている要素は無いですよ?

妖気もないですし」

「そうじゃったか…」

私は他にも妖怪がいないか警戒していたが他に感じないのでもう
いないだろうと刀をしましう

「失礼しました、話を戻しましょう」

「そうじやな、瑞樹君じやが高畑君の担当クラスに通ってもらうこと
になるが構わんかの?」

「はい。学校に通う事が初めてなので緊張しますが見知った人がいる
なら薄れるでしょう」

「そうかそうか、ではまた明日ここに8時に来てくれるかの?」

「分かりました」

「うむ、今日の宿じやが、女子寮の管理人室を一時的ではあるが使いな
さう」

「ここに来るときに一度寄ったから分かるよね？」

管理人室は入ってすぐ左の扉だよ」

「わかりました、それでは失礼します」

「うむ」

私は一人で学園長室を出て、街の詮索をする

(帰ってもする事は無いし詮索して地理を把握しておくことも大事だろう…)

夕暮れ前、女子寮前

「それにしても不思議なところだな…あの木も大きいし…」

そう呟いて寮に入ろうとする私の手を誰かが後ろから掴む

私は反射的に振りほどき掴んだものの姿を確認した後、首を掴み貫き手を鳩尾に添える

「何者だ？」

「ぐっ!?がっ!」

「え?あ、ごめんなさい!普通の人だったの!」

気も何も感じないし何かをやっているような体じゃないと分かり直ぐに手を離す

「ごっごっごっ!」

いや、こつちもすまん、いきなりじゃ混乱するのはあたりまえだ…

私は長谷川千雨、女子中等部二年だ」

「ごめんなさいね、私は風鳴瑞樹、女子中等部に編入することになったの」

「そうか、いやそんな事よりだ…

あの木は…ツいや、いい…」

あの木、という事は私の声が聞こえたから呼びとめたのかな?

「あの木、大きいよね? いったいいつから枯れる事もなくあるのか不思議だよね?」

「ツツ!!…あの木は…大きいよな!? 不思議だよな!」

「…何をそんなに焦ってるのか私にはわからないけど…そうだね、ここに来る前の山でもあそこまで大きいのは見たことないかな」

「車と並走して走る人間は…普通か？」

「普通じゃないんじゃないかな？」

私は出来るけど、あそこまで速く走るのに瞬動もなしだとかなりかかったし」

「……ここは、普通とは…違うよな…？」

長谷川千雨さんが何を言いたいのか大体掴めてきた

自分は普通じゃないと思っっているのに周りには普通と思っっている。

でも本当に普通じゃないのに自分だけ意見が違うから浮いてくる。

そんな中自分と同じ事を思っただ人が現れた。

だからこそ自分の意見が普通だと思いたいがために私を呼びとめてしまった、と。

こんなところかな？

「何を持って普通とするのか私にはわからないけれど、少なくとも一般の人間が行うのはおかしいね」

「…やつと…やつと見つけた…私と同じ意見を言ってくれる人を…」

「そんなことで泣かないでよ…私が泣かしたみたいになってるじゃない」

周りの視線が痛い、見知らぬ女子が生徒を泣かしたみたいな冷やかな目をしている…

「…すまん、もう大丈夫だ、迷惑ついだ、何処か出ないか？私が出すよ」

「そう？なら御相伴にあずかろうかな」

「ああ、こつちだ」

私と長谷川千雨さんは喫茶店に入った

「いらっしやいませ、二名様でお間違いないでしょうか？」

「ああ、奥の席いいか？」

「はい、大丈夫です。」

二名様、12番テーブルです！」

私達は奥の話があまり聞こえない席に着いた

「好きなものを頼んでくれ、お勧めはコーヒーとケーキだな」

「甘いものはあまり好きじゃないからコーヒーと…マフィンにしよう

かな」

「OK、すみません、コーヒー二つとケーキ一つ、マフィンを一つ」

「畏まりました、少々お待ちください。」

店員さんは仰々しくお辞儀をすると下がっていった

「さつきはすまなかつた」

「ううん、大丈夫だよ、気にはしてないから。私も自分と同じ境遇の人を見つけたら泣いちゃうと思うもの……」

「ありがとう、それで、風鳴……さんの眼にはどう映る？」

「瑞樹でいいよ、学年も一緒だし」

「そうだね……何もかもがおかしい。この一言に限るね。」

「何もかも？」

「そう、一度私の親代わりの人の実家に行ったのだけど和風っていうのかな？ 木造建築が主流だったのだけれどここは石造り、田舎の外国って言っても通じるくらい日本の色が少ないの。」

まるで外国風にすることで何かを隠しているみたいに」

何かを隠している、気とは違った気配を強く感じる気配……魔法の……

気配……

「何かを隠して……」

会話が止まったのを見計らったように店員さんが商品を運んでくる

「お待たせいたしました！コーヒーをお2つ、ケーキとマフィンがお1つづつですね。」

「ありがとう」

私が微笑みながら礼を言うと店員さんは顔を赤くして去って行った

何故顔を赤くする、同姓でしょう……

「……話変わるけどいいか？」

「なに？」

「……なんで和服着てんだ？」

「私の私服ってこれしかないの」

「……色々ぶっ飛んでんだな」

と言った千雨さんはコーヒーにミルクと砂糖を入れていく

「千雨さん！」

「うおあ!?!何だ!?!」

「コーヒーは最初の一口をブラックで飲んでから味を変えて楽しむものだよ!一手目から入れちゃったら意味ないでしょ!?!」

「私はブラックは飲めないんだ…」

「それでもだよ!ここのお店の人が商品に合うようにブレンドしたコーヒーをそのまま味合わないなんてコーヒーが可哀想だよ!」

店主らしき男の人が苦笑いを浮かべているが私にはわからなかった

「え?あ、うん、ごめん」

「まったくもう…」

と怒りを抑えるためにコーヒーを啜る

そしてマフィンを一口食べてからまた啜る

「……………」

「どうした?」

ミルクを入れてコーヒーを口にして、マフィンをかじる

「……………」

「…。」

「…60点かな」

「は?」

うん、コーヒーの酸味をもう少し出したほうがマフィンには合うかな

「千雨さん、一口頂戴」

「え?お、おう…」

ケーキを一口に切って私にくれる

「あくんっ」

「…あ」

うーん、この甘みだと今度は酸味が強いな…

女性に対してはケーキの甘みがもう少し合ったほうが人気は出ると思うし…

「み、瑞樹？」

「千雨さんは甘党？」

「いきなりだな、まあいい。甘すぎるものは食べきれないが比較的好きなほうだと思うぞ？」

一般的な甘みは好きつかあ…

千雨さんは1対1で入れた、ならもう少し入れてもいいと思うかな

「瑞樹？」

「千雨さん」

「あ、はい」

「コーヒーにミルクもう一つ入れたほうがいいと思うよ」

「え？お、おう」

実際にミルクをもう一つ足して食べ始めた

「え？すごく丁度いい…」

「でしょ？」

と言って私はマフィンを食べ進める

「なんでもう一つ入れたほうがいいと思ったんだ？」

「このケーキは若干だけど甘みを抑えてるの。甘過ぎないようにね

でも今度は甘さが足りないからコーヒーが苦く感じる人が多いの。

でも千雨さんはミルクと砂糖を1つつつ入れたその選択は間違っていないけど一般女性がちょうどいいと感じるには少し足りない。

でも砂糖だと甘過ぎるから入れなくなるけど、ミルクにも甘みがあるから丁度良くなるの」

でも砂糖だと甘過ぎるから入れなくなるけど、ミルクにも甘みがあるから丁度良くなるの」

「…ほえ、すごいな瑞樹は」

「私が出来るのはコーヒーの裁量だけだよ」

少し笑った後食べ終えた私達は寮まで戻った

少し笑った後食べ終えた私達は寮まで戻った

「瑞樹は最初ここに来てたけど部屋はもう決まってるのか？」

「ううん、決まるまでだと思うけど管理人室…入って左の部屋だって

聞いたわ」

「ふくん、だったら明日一緒に行かないか？朝はかなり混むかガラガラだから」

「うん、いいよ。八時までに行かなきゃいけないけど」

「うん、いいよ。八時までに行かなきゃいけないけど」

「中途半端な時間だな…なら7時30分に玄関で」

「分かったわ。また明日ね」

「ああ、また明日。お休み」

「……お休み！」

と言つて部屋に入る

…お休み…かあ…三年…いや四年ぶりかな、こんなにも心温まる言葉だったんだ…

きつと今の私は破顔しているだろうな…頬の筋肉が下がっているのがわかる。こんな表情は久方ぶりだ…

千雨さんに見られてしまっただろうか…もし見られていたら少しはずかしいな…

顔を赤くしたまま小振袖、長襦袢、袴を脱ぎ、ベッドに寝そべる

……

「落ち着かない…」

立ち上がり布団を床に敷き直し寝る

「あくお風呂入ってない…ま、いっか」

気で球を作り電気のスイッチに当て消す

「時間的には20年か…まだ生きてるかな…？」

—— F (エフ) ——

4 時間目 「初授業」

朝 日が昇り始める時間

「よし、今日もいい調子。今日から学校だから汗をかかない程度の鍛錬でいいかな？」

布団をたたみ押し入れに仕舞い肌襦袢を脱ぎ道着に着替え、竹刀袋を手に外へと向かう。

寮の近くに森があった筈だ、ランニングしつつ移動

「うくん、軽くなるよと100ずつでいいかな」

「思ったより早く終わってしまった…」

現在7時前後、時計というものがないから分からないが感覚ではそれくらい

寮の前で瞑想をしながら待とう。

……。

……っ！

一際強い気、量じゃなく鋭い刀のようなギラギラした荒い気。

寮から出てこようとしている

眼を開く

出てきたのは漆黒の髪を横で纏め、鋭い目つきをそのままに何に警戒しているのか気を張り巡らせ、竹刀袋を持った中学生。

明らかに何かやっている、動きに隙こそあれど、その隙を隠すように歩いている。

…が

「隙だらけですよ、お嬢さん」

後ろから声をかけ、右手がくるであろう場所ゆくり払い近づくと

「ッ!?!」

私の行動とは裏腹に前に跳びこちらを見て着地した

…

「今の瞬動は見事です、よく鍛錬されている。」

ですが今の行動で二回死に仲間が一人死にしましたね。減点3で

す。」

「貴様はいつたい何者だ？」

「声に硬直して一度、跳ぶ瞬間に一度、着地前に一人、その動きのままでは大切な人すら守れずに死んでいます。気をつけましょう。」

「貴様は何者だと聞いています！」

この女性は動きはいいが行動がちぐはぐだ。警戒しているのに攻撃せず、認識しても反撃せず、知りたい事だけ聞こうとする。

まるで

「人を怖がっているようですよ？」

「ッ!？」

「相手が敵なら名を訪ねる事自体がナンセンス。敵と判断すれば切ればいい。その得物は飾りですか？その手は義手ですか？

敵でなくても後ろから近づいたのなら拘束すべきだ。

その調子だと……

——大切な人……死にますよ？——

(くっ……隙がない……私に指摘できるほど上の者は神鳴流には沢山いてもこの地には数えるほどだ……何者なんだ……この女っ！)

「おーい、瑞樹ー!」

「あ、おはようございます、千雨さん」

千雨さんが寮から出てきたので振り返る

「ッ!!」

パシッ

「動きだしは75点、ですが全体の動きは30点ですね。」

視界が切れるタイミング、死角からの攻撃、定石道理過ぎる。おまけに殺気ムンムンでまるでテレフォンパンチ。

今のは一拍遅れても奥まで行き、死角をなぞる様に攻撃するのが可ですね。」

定石道理の軌跡を描いた彼女の剣は気で覆っただけの私の手に掴まれる

「あれ？桜咲……さん、どうしたんだ？」

「ええ、ここで待っていた不審な和服少女に職務質問していたようで

すね」

「…はい、きよろきよろとしていて怪しかったのでつい…

申し遅れました、麻帆良学園女子中等部2年桜咲刹那です。」

「こちらこそ、本日中等部2年に編入する風鳴瑞樹です。」

「こんなところで道草食つてたら遅れる、行こうぜ」

「そうですね、桜咲さんも一緒にどうです?」

「…そうですね、ご一緒しましょう。」

そんなこんなで何も接点がなかった3人は何も語らず校舎まで辿り着く

「ここまでですね、来客用の玄関から私は行きますので」

「そうだな、放課後も一緒にかえるか?」

「そうですね、桜咲さんは?」

「私は用がありますので…」

「それでは、また」

「ええ、では」

桜咲さんは一人で向かっていった

「瑞樹も早く行けよ。時間、あんまねえぞ」

「そうですね、では終了後に校門で」

「おう」

千雨さんもすぐに歩いて行つた

私は来客者用の玄関から上がり、昨日通つた道を進んでいく。

コンコンコン

「風鳴瑞樹です」

「入ってよいぞ」

「失礼します。」

部屋に入るとタカミチさんと学園長、それと知らない眼鏡の40
dッ!!?

バツ

「……(ニコ)」

…s、20代くらいのお姉さんがいた。

「ふおっふおっふお、おはよう瑞樹君、さっそくじやがこの学校の制服に着替えてくれんかの。しずな君。」

「はい、学園長。」

「こちらがこの学園の中等部の制服になります。」

「これに着替えるのですね。」

「そうだよ、この学校に来るときはその服を着用するようにね」

「はい」

返事をしてから振袖と長襦袢を脱ぎ袴を「ちよつと待ちなさい!？」

「はい？」 脱げなかった。

紐を解いた状態から硬直。

「何堂々と着替えようとしているのですか!？」

部屋もあります！少しは恥じらいを持ちなさい！」

「恥じらうも何も見られて困る体ではないですし、私は気にしませんよ?。」

「そういう問題ではありません!!男性の方もいらっしやるのですから常識をですね…」

「その常識は恥じらうからこそですよ? 自慢ではないですが私の体に恥じるべき場所などありません」

「……………」

「別に下着くらいでなんですか。わたしは晒と禪です。下着じゃないです。」

むしろ下着はこの肌襦袢だとおもいますよ?。」

「……………」

「私は気にしない、男性は見れて嬉しい、悪いことなんてないですね。」

では…」

「ちよつと来なさい!!」

「きゃっ、急に引つ張らないでください! 袴が落ちて引きずってるじゃないですか…」

「うう…汚された…久方ぶりに…」

「失礼なことを言わないでください！着替えさせただけでしように!?
それに、なぜ洋服の着方を知らないのですか!?襦袢の上から着よう
として…」

「服って襦袢の上からきるものじゃなかったの？母さん…」

「どれだけ常識知らずの田舎娘何ですか!？」

母さんの嘘吐き…襦袢の上から着るのって和服だけじゃない…

小さい時着てたんでしょ…元アイドル…

「だ、だいぶ偏った知識だね…」

「一悶着あったが…話をしよう。瑞樹君の通うクラスは予定通り2A
じゃ

「ここにおける高畑君が担任、しずな君が副担任じゃ」

「改めてよろしくね、瑞樹君」

「はあ…」

源しずなです。よろしくお願いしますね」

「はい、風鳴瑞樹です。よろしくお願い致します。」

「では、早速教室に行ってもらおうかの」

「僕に着いてきてね」

「はい」

失礼しましたと言い学園長室を後にする

「学校での事だけど、僕はよく出張に行くからしずな先生に聞くと言
い。男の僕よりも同姓の人のほうが聞きやすいでしょ？」

「…同姓だと逆に意識してしまうので基本的にタカミチさんに聞きま
すね」

「…?」

「風鳴さん、1つ聞いてもいいかしら?」

「はい、何でしょう?」

「風鳴って名前は本名よね?」

「厳密には本名じゃないですが、まあこちらでの名前ですね」

「?? まあそれで、やっぱり風鳴さんのお母さまは元アイドル歌手の……」

「ええ、片翼を無くした不死鳥「ツヴァイウイング」の風鳴翼です」

「まあ！ やっぱり！」

あの伝説的歌手にお相手がいたなんて知らなかったわ」

「それは間違いですね。」

私は所謂養子……孤児なんです」

「それは……」

「山で倒れていた私を拾い、育ててくれましたが男の人は伯父以外に来てないですし、出掛けても男の匂いもしなかったので生涯一人身でしたね。」

しずな先生はタカミチさんがいるから心配なさそうですね」

「ぶふう!!」

「え!? あ、その……/ /」

「着いたよ、ここが今日から通う教室だよ。僕が呼んだら入ってきてね」

「はい」

私の返事の後、タカミチさんとしずな先生は入って行った……

けど

「一瞬、桜咲さんがいたよね……?」

気配探知

扉付近……中央……窓側……後ろの廊下が……わ……にいるのかなり気配が

強い!?

気もそれ以外も何も無い、にもかかわらず……

……教室の中の誰よりも強い……

「……き君……瑞樹君?」

「あ、はい、失礼します」

ガラッ

あ、やつぱりいた

私は中央の教壇まで行き黒板に名前を書いて一礼

「風鳴瑞樹です、諸事情あつて今まで学校に通ってなかったので色々
と分からない点が多いかと思いますが皆さんよろしくお願ひします」

もう一度頭を下げ、あげると一番後ろに千雨さん発見

笑いながら小さく手を振る

驚愕から硬直、顔を赤くして手を振り返してくれた

「今誰に手を振った!？」

「確認した者は挙手!!」

「くそ、あんなに綺麗な子の友達一号誰!？」

…)

「はい夕映吉!!」

「長谷川さんです。」

「なっ／＼／」

「なんですとお!!!」

「あの地味で目立たない長谷川さんが1号で顔を赤くしている!？」

「ラブ臭が微かにするわ!!」

うわあ…すごい…これが女子中学生…

「しずな先生！これを見習うと良いのですね!？」

「うん、これは悪い例だから反面教師にしましょうね。」

「ちよつと皆!!転校生ちゃんと高畑先生が困ってるでしょ!!」

私とタカミチさんの為に誰か怒ってくれてる…

「彼女を…」参考にしてはだめよ、普段は素行が悪い子だから。」

…もう一度怒ってくれた人を見る、懐かしい人の声に似ていた気が
したから…

…

フオッ

タンッ

「キャ…な、なに?…いつここに来たの?」

教壇からその人の机の上に瞬動で移動する

着地は膝と手をつき、無理な移動だったからか下を向いている

「……あ…す、な…？」

「なんで…あなたがあたしの名前を…ッ!?」

私は我慢出来ずに抱きつく。

ギョツと…もう離さないように…もう一度会えた事に感謝して…

「ッ…くう…あ、いた、かった…」

涙が止まらない、20年も経ってるから死んでいてもおかしくないのに…

「何を言って…」

「また…会えて…良かった…姉さん…」

「……っ!!……。ごめんね…。」

あたし、記憶が無いの…。」

「…ッ!?……。」

抱きついていたのを離し、机から降りる

「ううん、こっちこそごめん…似てただけで人違いだった…」

「ああ、瑞樹君そのまま後ろまで行きなさい、長谷川君の隣が君の席だよ」

「はい」

シーン…

「おっす、さつきぶり」

「うん、同じクラスになれてよかったね」

「神楽坂が昨日言ってた同じ境遇の?」

「ううん、人違いだった、名前まで一緒なんだけどかなり前に中学生ぐらいだったのを失念してた。にやはは…」

「…そっか、いつか教えろよ」

「……いつかね…。」

小声でボソボソと喋り授業のチャイムが鳴ったから会話を止める

「それでは一時間目は僕の英語だけど瑞樹君の学力を見たいから中規模小テストをやります」

「せんせー、風鳴さんの質問時間くださいーい」

「それじゃ終了の20分前に採点して朝倉君が50点以上なら質問。未満なら全員補修でいいね。それじゃ配るよ」

「朝倉!!死ぬ気でやれ!!」

「マジ頼むよ!!」

「あと、瑞樹君が50点未満でも同じだから、初めての授業らしいからね。僕も責任重大なんだ」

「風鳴さん頑張ってる!!」

「ファイト!!」

「気楽に解いて行こうね?」

「あたしの時と全然違う反応…」

「皆さん呼びにくいと思うので瑞樹で大丈夫ですよ。後、敬語もどけてください!」

「まず瑞樹ちゃんかどけようよ!」

「あ、そっか。みんなよろしくね☆」

『『かわいいー!!』』

「テスト始ってるよ」

『『ぎゃー高畑先生の鬼い!』』

(あれ?このテスト簡単だ)

走り出したペンは止まらない

「最優先で採点した二人の点数を発表します。」

『『いいえーい!!』』

「出席番号3番朝倉和美」

『『でんでれれれれれれれれれれ、ででん!!』』

「53点ギリギリだね」

「よっしやあ!!」

「次、風鳴瑞樹」

『『でんでれれれれれれれれれれ、ででん!!』』

「100点おめでとう！」

『うおー!!すげー!!』』

「瑞樹君に関しては見事な回答だったね、学力の高さが窺える」

「It was very easy and was able to untie the small test carrier. I got this time in 20 minutes. (今回行われた小テストはとても簡単に20分で解く事が出来ました。)」

「うお!!何言ってるか全然わかんねえけど簡単だったってことは理解できた!!」

「うむ、今のテストは簡単に20分で解いたテ言ってるネ」

「流石チャオりん、今のよく聞き取れたな」

「今瑞樹君が言った事を今日の宿題にしようかな」

それじゃチャイムが鳴るまで質問タイムだね」

「さあ瑞樹ちゃん、第一回独占インタビューさせてもらうよ、新聞に載るから隠してほしいところは言ってるね」

「う、うん(今の動き私でも知覚出来なかった…)」

「それじゃあまずは自己紹介だね」

私は出席番号3番朝倉和美、好きに呼んでね」

「はい、よろしくお願いします、和美さん」

「何気に下の名前は始めてかも…」

こほん、ここから先は記事なるから」カチツ

(テープレコーダー?)

—以下音声主体でお送り致します。—

「それじゃ最初は自己紹介からお願いします。」

「はい、本日11月23日火曜日0800付で麻帆良学園女子中等部2年A組に編入しました、風鳴瑞樹です。」

「はい、次はこの学校で目指したい事やりたい事を教えてください」

「うくん、目指したい事は特にはありませんがそうですね、このクラスの皆と友達になりたいですね」

「分かりました、次はここに来る前は何処にいたんですか？」

「この学校に来る前は何もない山奥に一人で住んでいました。そこにタカミチさん…高畑先生ですね。が訪ねてきてこの学校に来ないかと誘われました。きつと母が根回ししてくれたのでしよう。そうしてこの地に来たのが昨日ですね。」

「ありがとうございます、続けて年齢、スリーサイズ、好きな男性のタイプを教えてくださいませんか？」

「はい、年齢は14歳ということになっています。」

「失礼、なっている…とは？」

「10から先を数えてないので。もしかしたら13か15かもしれないですし、もしかしたら20歳かも知れませんね。」

「失礼なことを…」

「いえ、お気になさらず、スリーサイズですね。上から85、56、80です。」

「胸囲は少し大ききでは？」

「服の下はそのまま裸で晒を巻いています」

とボタンを全部外し服を広げる

「ふ、服は肌を隠す物なので、しっかり着てください。高畑先生もいます。」

「ふ、それではここで私から名言を送りましょう。」

「名言？それは…？」

ドドン!!

「自身の恥じる必要のない肌は誰に見られても恥ずかしくなんてありません!!」

「せめて前を隠してからおっしゃってください、勢いよく立たないでください。パンツ見え、パンツじゃねえ!!」

ドドン!!

「禪です!!」

「女じゃねえ!」

(すげえ、あの状態の朝倉が突っ込みに入って尚追いついてない…)

(瑞樹…恐ろしい子…)

「……はっ、私はいったい…」

「好きな異性のタイプでしたね」

「せめてそのきれいな肌を隠してから喋ってくださいお願いします。」
「……。好きなタイプは長身で、色白、髪も白、体は大きいというより細く引き締まってるほうがいいです。」

一番は隣に居るだけで安心できて、普段無口でも、優しさがあれば完璧です!!」

「そこまで細かいという事は好きな人が？」

「おはずかしながら、2j年前から……」

「そうですね、時間も押してきてますので最後です。」

この学園に来て変わった事、嬉しい事。誰に向けてもいいですのでお願いします。」

「それではこの場を借りて複数に。」

まず、長谷川千雨さん。」

「お、おう……」

「この学園に来て何も知らない私に悩みを打ち明けてくれてありがとうございます。私達の斬っても切れない縁となつていつまでも続きます。」

辛い事もあつたと思うけれど人は過去があるから生きていける。今があるから希望が持てる。明日を見ようと張り切れる! 頑張れ! 乙女!!」

「二人の出会いのお話ですか、また今度お話を」

「千雨さんに許可取ってからですね。」

続いて、この学園に住む女子生徒に」

「お、いいですね。」

「これ絶対書いてくださいよ!」

「約束しましょう」

「言質とつた……」

コホン、この学園に住む女子生徒の皆さん、ぜひ私とお友達になつて色々なところに遊びに行きましょう! 誘ってくれる方大募集!」

「いい感じですね、まだあるなら、お早めに」

「…彼氏に振られた女性、私のところに来てください! 彼氏さんより楽しいこと出来ます! 断言します!!」

「……は？」

「次で最後。ここに来て一番あいて」「ちよつとお待ちを!!」「なに？」

「…先ほどの発言は…」

「文字通り。ここn」「だからストップ！」

「記事にするんでしょ(ニコ)」

「(ガクガクブルブル)」

「改めまして、ここに来て一番会いたかった人とすれ違う事が出来たのでその人に…。」

『あの時はごめんなさい、未来にしがみついた私を押し出してくれてありがとう。あの時のことは私の中で後悔として根強く残ってしまいました。』

でも、今度は私が助ける番だから…。今度こそ私は、あなたを過去から引き上げるから…。もう二度とあんな事もあんな思いもしたくない、そのために強くなったから…。どんな逆境も二人でなら跳ね返せること私たちは知ってるよね？

今度は抜け駆けなんてさせない、死ぬ時は一緒だよ…。」

「……。」

「何？」

「真ん中だけ抜いたら…」

「メツだよ！」

「せめて好きな人の名前を…。」

「…F (エフ) …名前が無いからそうつけたの…。私が」

キーンコーン……

「…時間だよ、号令。」

「起立、礼」

『ありがとうございました』

5時間目「歓迎」

起立、礼

ありがとうございます

「瑞樹、授業一日どうだった？」

「うん、楽しかったよ、いつもは母さんが一人で教えてくれてただけだったから、皆と一緒に学ぶっていうのがこんなにも違うんだなって思えた。」

「それなら良かったかな、これから学園内を案内するよ、まだあんまし見回れてないだろ？」

「ほんとに？」

それならお願いしちやおつかいな？」

「おう、まずは図書館島からだな」

私と千雨さんは二人で並んで校舎を出て行く。そのまま図書館島と呼ばれる湖の真ん中にある湖島を指指して進んでいく。

「ここが図書館島だ、見た目は普通だが奥の方に行くとか罨とか侵入者撃退用の装置が多数あるらしいな。」

「へえ、怖いところだね、今この大ホールみたいな所は平気なの？」

「一般公開されている所は問題ないらしい。それと図書館島に纏わる話があつてな、あまり奥の方まで行き過ぎるとローブを着た謎の優男が出てきて変態的なことを言つて近づけないとかなんとか」

「(ローブの優男で変態…アルさん？…考え過ぎか…) 思ったより近づきたくないところだね…」

でもあの人も半不老不死に近いから有り得ない訳ではない…かな

「そんじゃ、次に行くか。次は龍宮神社だな、休日に時々クラスメイトの龍宮さんが巫女さんやつてる」

「龍宮…龍宮…ああ、肌が少し黒くて絶対に中学生じゃないと思われのような背の高いキリツとした人だ」

「説明的な思い出し方ありがとな。そう、その龍宮さんだ。全然似合っていないけどな」

巫女さんってことは巫女服だよな…うん、外国人のコスプレみたい

になりそうだなあ

「…よし、いい時間だな、悪いけど教室に忘れ物したみたいだ…一緒に来てくれないか?」

「…この場合どう答えたらいい?」

「どうって?」

「本当に忘れ物をしてしまった千雨さんを笑いながらいいよって応えるのか、時間を気にしてたから裏がありそうと読んで嫌だって応えるのか、地味で目立たないと評価されていた千雨さんの可愛そぶりに涙しながらしようがないなあって応えるの」

「どれも余計なお世話だ!瑞樹は黙っていいよって言えばいいんだよ!」

「うんうん、素直でよろしい」

「何様だ!」

私たちは笑いながら校舎に向かって歩を進めていく

「話が変わるんだけど、千雨さんコスプレの服とか持ってないよね?」

「うぐつ、いきなりどうしたんだよ、ホントに」

「コスプレって聞いてちよつとやってみたいなって思って、ほら、わたし素材がいいから」

「自分で言うなよ、認めるけど」

「それで、持ってる?」

「…持ってるよ…」

「ほんとに!?着てみたいんだけど大丈夫かな?」

「サイズ…合うかわかんねえぞ…」

「身長、千雨さんとあんまり変わらないから大丈夫でしょ?」

「その胸回りの無駄な脂肪が大丈夫じゃねえんだよ!!」

昇降口から上がり靴を履き替えて教室に向かう。

なんでかな…千雨さんといるといつも胸が熱くなる…。Fと居た時だってこんな風になったことなんてなかったのに……。

これが…友達ってことなのかな……。

教室の前までたどり着いた時、ふと思ったことが言葉に出てしまっ
た

「私、千雨さんのこと好きみたい…」

「んなっ!!?」

ガラツ

『瑞樹ちゃん、麻帆良学園にようこそ!!』

「……え?」

「ほおら、主役は真ん中の席だよ!」

「え?…え?」

「何を呆けてるのよ…瑞樹のために皆で歓迎会をやろうってこうなっ
たんだからもっと堂々としてなさい」

「あ、ね…アスナさん…」

呆けている私のもとに姉さんが来て説明してくれた

そっか、歓迎会か…私が来た…初日にこんなこと…してくれるなん
て…

「皆だいきさだあくああああ…」

突然のことで驚いたけど、それ以上に私が居ても迷惑じゃなくて、
来たことに喜んでくれてる…たとえ形だけでも…それが嬉しくて、溢
れてくる涙が堪えられない

「ちよつ、始まったばかりで第位一声に泣きながらとかどんだけよ!」

「泣くの早いよ!」

「だって…だってえ…。私、どこに居たって…疎まれたことしか…な
かったから…。私が居て…喜ばれたこと…全然…なかつたからあ
…。」

私の言葉で教室の中が静まり返る

「(この言葉…どこかで…)…大丈夫だよ、瑞樹が居て迷惑になること
はここでは絶対に有り得ないから」

姉さんが静かになった中で声を掛けてくれる

「世界から拒絶された私たちは…祝福されたら…ダメだって…」

『この地から即刻立ち去れ!化け物ども!!』

『あんたたちなんていなくなればいいのに!』

『君たちは世界から拒絶されたからその力を手に入れたんだろう?』

アスナは唐突に流れてくる記憶という名の奔流に意識を割かれる

「(なに…これ…) …大丈夫…ここなら、大丈夫だよ…ミズキ」

「でも、でも…私達が居たら…」

なおも続く記憶の中に比較的新しい記憶が脳裏をよぎる

(これから…君をあんな柵から開放するために…あの世界から出て静かに暮らすから…もう、気にしなくても大丈夫だから…僕といっしょに平和に暮らしていこう)

「そんなこと、こつちでは関係ないでしょ? あそこは違うから。大丈夫、大丈夫だよ。ミズキ…」

姉さんが背中側から私を抱きしめてくれる…温かい…

「ね、アスナさん…記憶が?」

周りに聞こえないように小さな声で呟く

「ううん、全然…。でも、ミズキが泣く原因はちよこつと視えた。私達がなんなのかは全然」

「…。よし!! 皆さんご迷惑をお掛けしました! 風鳴瑞樹復活です!!」

「よ、よーし、そんじや瑞樹ちゃんがここに来たことを祝して…」

『『かんぱーい!!』』

ガラガラ

「お? 始まったところかい? 間に合ってよかったよ」

「そうですね、この子たちはホントにいきなりなんですもの…」

タカミチとしずな先生が教室に顔を出してくれた

「高畑先生にしずな先生! 来てくれたんですか!？」

「もちろんだよ、彼女は僕がここに呼んだんだからね」

「風鳴さんはとても不器用な子なので心配してきたのよ」

「ね? ここでは、過去のこと気にすることなんて無いから。このクラスの皆、何かしらあるみたいだから詮索しないことが暗黙の了解になってるのよ…もちろん私もね?」

「アスナさん…」

「それと、私の事。無理してそう呼ばなくてもいいのよ？最初みたいに姉さんって呼んで。私は記憶が無いから、また最初から…この場所で、ホントの最初を始めようよ、ミズキ」

「うん、姉さん」

私達で小さく笑い合う、昔みたいな感情の落ちた頃とは違う、心から笑顔になれる笑顔で

「よーし、お二人さんの仲直りも済んだところで騒ぐぞー！」

「はい！1番、風鳴瑞樹！歌います！」

「お、いいぞー！」

「歌え歌え〜！」

この小さくも楽しい歓迎会は、暗くなるまで続いた。私の記憶に残る1ページとなっていつまでも残るだろう

「瑞樹くん、ちよつといいかい？」

歓迎会も終わり、片付けて千雨さんと帰る間際、タカミチさんに呼び止められた

「どうかしましたか？タカミチさん」

「君の寮での部屋なんだけど、長谷川くんと一緒にの部屋になったからそれを伝えにね」

「ホントですか!？」

「待つてくださいいよ、私の部屋は小部屋で既に葉加瀬さんと一緒です」「そうなんだけど、葉加瀬君があまり寮に戻らないと聞いて学園長が、

ね…」

「はあ…分かりました」

千雨さんと一緒に暮らせるのか、楽しみだ

そんなことを話しながら私たちは寮に戻っていった

寮につくと最初に管理人室においてあった私の荷物を纏めて千雨

さんの部屋に行く。千雨さんは私が荷物の整理をしている間に部屋を片付けるから着いたらそのまま入っていいと言っていたので部屋に上がる。

「着いたよ、片付けはどう?」

「な!?!はや!も、もうちよつとだから外で待つてくれ!」

千雨さんの言うとおり少し本が残っていた、それをしまうのだろうか
「うん、わかった……?これ、なんの本?」

「ん?あ!バカやめろ!」

落ちていた本を半ばから開く。どうやら漫画のようで絵とセリフが書いてある。そのまま捲っていくと男の人二人がソファアのうえで裸でアレしている絵が見えた。数秒その絵を見つめていると千雨さんから本を取り上げられたが気付かずに硬直している私を千雨さんが不安そうに見つめていた。

「…どうしたんだ?瑞樹」

「…」

問いかけにも気づかず私はただただ呆然としていた

「(あれはやっぱアレだよね…翼さんにやられていた私みたいな感じで同姓でアレしてたんだよね?待つて…性別が変わるだけでこんなにも気持ち悪くなるの?それとも翼さんに感化されすぎて女の人じゃないとそういう感情にならないとか?待つて待つて、それはダメだ。なにがダメかわからないけど人として終わりの気がする。もはや考えうるなミズキ)…」

「だ、大丈夫か?」

「(それにしても男の人同士って気持ち悪!なんかものすごい不快感が…)…うえっ」

「ちよ!!?待つて待つて!ほんとに大丈夫なのか!?!」

「…だいじよばない…」

口元を抑えたまま私は答えた

「わああ!!待つて、早まるな!こっち来い!」

千雨さんは私の肩を抱いてトイレまで連れて行った…後に聞こえてきた音は水音とトイレを流す荒っぽい音だけだった…

6 時間目 「偶像」

「今回のことがあったから命令からお願いに変わる、あの扉は開かないでくれ。似たようなものしか入ってないから。」

「…うん…。わかったわ…。絶対開けない、死んでも開けない。」

千雨さんの本を開いてリバーズした時より1時間後、二人はリビングで正座していた。

流星にまた吐かれてもたまったものじゃ無いので寮生活に関する注意事項を確認していた。

「最後に、午後6時以降で寮の外で広域指導員に見つかるとう指導室に直行だから気をつけろ。」

「うん…。」

先ほどのことがあるから、私の気分は優れない、体を動かす気力もない…。鍛錬は一日サボると取り戻すのに3日はかかると聞く。更に学校生活も疎かに出来ないから普段より量も少ない。

はあ…。

溜息がこぼれる。辛い、何か癒やしがほしい…。

気付けば千雨さんも姿が見えないし…はあ…。

「とりあえず、瑞樹の言ってたコスプレはどうすんだ？」

千雨さんの声が聞こえたのでそちらを向く。そこで私が目にしたものは、全体的にピンク色でふりふりが沢山ついた服を着ていた。

「千雨さん…その格好は？」

「ああ、これは私のサイトでの制服みたいなものだ。あんまり言いたくはないが私はネットアイドルをやってるんだよ、だからコスプレの服があるんだ。」

「ネット…アイドル!？」

「ああ、少し気になったから調べたんだが瑞樹の母親ってリアルでアイドルやってたツヴァイウイングの風鳴翼だろ？」

「まあ、本当の母親じゃないけどね」

「そうなのか!?じゃあ、本名も違うのか?」

千雨さんなら本名を言っても大丈夫かな?

あつちとは全くの無関係だし…

「うん、私の本当の名前は『ミズキ・ウエスペルタティア・テオタナシア・エンテオフュシア』。千雨さんの知らない土地ではお姫様とも悪魔の憑き人とも言われた超有名人だよ。私の前では誰もが頭を垂れるほど偉い人なんだよ。」

少し作り話みたいに聞こえるが実際に90年ほど前の力に目覚めていない時はお姫様として扱われていた。

「…ふーん、そうか。」

「あ、その顔は信じてない顔だな!?ホントの話なんだからね!救国の聖女、アマテルの末裔として格式高い貴族の中の貴族に生を受け、ウエスペルタティア史上最年少の才女として5歳の時から王政の一角を切り盛りしてたんだから」

「そうかそうか、そりゃあすごい」

「ふん、いつかその顔が前に来た時に千雨さんにあんなことやこんなことをして、ニヤンニヤン言わせてやる」

「そんなことが起きたら瑞樹の前で逆土下座かましてやるよ」

数年後の未来を少し語るならば、背中を地面につき仰向けの状態で両手両足を土下座の形で謝る女性がいるのだが、語られることは無いだろう…

「ま、そんなことより、結局コスプレはどうすんだ?着てみたい服があるなら探してみるけど?」

「そうだね、ないこと承知で聞くけどフリーユージュルの時の翼さんの衣装ってある?」

「あるよ、私もファンだしな」

「あるの!?20年前の衣装だよ?千雨さん古くない?」

「いいんだよ、すごい歌手とすごい歌はいつまでも残り続けるんだ」

歌と歌手はいつまでも…か。

私もそんな存在になつてみたいもの…そうだ!

「…ねえ、千雨さん、ネットアイドルなんだよね?」

「そうだぜ、人気ランク1位だな」

「すごい！それでそれで、翼さん直伝の私の歌を千雨さんのサイトで流してみたい。ネットアイドル歌手って言うジャンルを攻めてみたい」
「無理に決まってんだろ、第一私のサイトでやる意味もないし、歌手の幅が狭すぎる」

「元歌手に上手いと言わせた私の実力、特とご覧あれ：あ、歌なしでフェザーズって入ってる？」

「風鳴翼の？入ってるけど」

くく♪

少女歌唱中

「多分それだけのく物語なんだ信じて My glow♪」

「：うん。それなら狙えるな。つー訳で早速流してみた」

「早!？」

うめえええ!!!

マジもんきたー！

馬鹿野郎！娘にきまつてるだろ！

なんか面影あるよな

名前はよ！名前はよ！

まだ慌てる時じゃない：名前はよ！

「だつてさ、どうする？」

「今これってどうなってるの？」

とカメラを指さして聞いてみた。

「今の状態だと、何も無いが回せばリアルタイムで送れるぞ。」

「お願いしてもいい？」

任せろと千雨さんは言い、小さなカメラをいじっている

「そうそう、カメラ回ってる間私の喋り方変わるけど適当に流せよ」

わかったと答えると千雨さんは頷いてボタンを押したあと立ち上がった

「みんなあ、どうだったかな♪私は、とっても上手だったと思うぴよん

♪」

「くふっ……、このたび私の歌を聴いてくれてありがとう。……ち、……ちうさん。私はなんて名乗ったらいいと思いますか？」

「えっとお、あなたの名前が世間に知られてもいいと思ったら、本名でもいいと思うぴよん♪」

「そうですね、では。改めまして、私の名前は『風鳴 瑞樹』です。チウさんと同じ教室で勉学を育んでいます。」

リアル友人ポジ来たーーーー

風鳴……だど!?

個人情報、知りたいけど聞き出せない!!!

「安心してください、みなさん。本名です。私も母のようないつまでも残る歌を残したいとチウさんに話すとこの場所を提供してくださいました。」

「チウはミズキちゃんのお母様やそのご友人方のお話がきいてみたいぴよん?」

「公にしているのか悩みますが母のことを幻滅しないでくださいね。」

まず、私の母はズボラです。どのくらいかという初対面の人間に焼きそばをマネたパスタに似たものを説明もなしに渡すくらいズボラです。」

まってその情報俺知らないんだけど

それはズボラではなくドジっ子と……

「一日の活力である朝食で美味だと絶好調に、最悪だと欲求不満な母に襲われました。」

キマシタワーーーー!?

た、確かに友人たちとの間にそんな噂を聞いたがまさか……

「絶好調でも襲われます。」

そっちの人だったーーーー!!?

ユリの花が咲き乱れる!!

「あ、百合の花、可愛くて綺麗で素敵ですよね♪」

ブルータスお前もか……

ブルータスお前もか

「?瑞樹です。」

天然様一名入りました!

いらっしやいませ!

いらっしやいませ!

らっしやつせー!

「あははは、皆さん息ぴったりです!すごいですね、チウさん!」

「チウは親子揃ってなのと幻滅ぴよん…」

「なにがですか?」

「…天然」

「…?海産物じゃないですよ?」

「…もういいぴよん…」

何かわからないけどすごく幻滅されてる…このままじゃいけない。

なぜか確信めいたものが私の脳裏に広がる。

「えっと、母のことは幻滅しないでくださいね…。私の母は、とてもい人で…えっと、えと…」

「大丈夫、大丈夫だから、幻滅なんてしてないから!泣くなつて!」

大丈夫!幻滅してないから!泣かないで!

おい!誰だよ瑞樹ちゃん泣かした奴!

「だって、翼さんはとてもいい人で…」

わかっているから!瑞樹ちゃんの心配することは何にもないから

俺たちは場を盛り上げようと息を合わせるだけで幻滅なんて絶対ないから

ツヴァイウィングは最高の歌姫なんだから幻滅なんてありえない

それより瑞樹ちゃんの事もっと知りたい。お母さまがどんな感じ
で育ててくれたのか知りたい

「ちうも瑞樹ちゃんの事もっと知りたいぴよん、お母さまの事を幻滅
するなんてことは絶対ないから瑞樹ちゃんがどんな子なのか知
りたいぴよん」

「皆さん…ありがとうございます…」

「瑞樹ちゃんは涙もろいんだから、皆も注意してほしいぴよん」

イエス、マム!

了解しました。

かしこ畏まりましたかしく

「ふふ、わかりました。皆さんのご要望にお応えします。」

それから私は翼さんと出会った頃からの話をして夜を過ごした

それから時間は飛ぶ

私の新しい出会いは運命を変えていく…

本来は語られることのなかったはずの物語…

いつか夢で見た私のいない世界とはまた違った世界救話

ねえ、最期の私は笑っているのかな？

7 時間目 「序章」

〈このクラスで英語を担当することになりました。よろしくお願ひします〉

〈京都なんてボク初めてで緊張しちゃいます！〉

〈アスナさんに酷い事して君は絶対に許さない！〉

〈エヴァンジェリンさん！ボクに魔法を教えてください！〉

〈コタロー君、一緒に行こう！〉

〈あなたがボクの故郷を襲ったんですか…ッ〉

〈これが学園祭…すごいお祭り騒ぎですね…〉

〈超さん、僕と一緒にマギステル・マギを目指しませんか？〉

〈フェイト・アーウェルリンクス！何故此処につ！〉

〈亜子さんたちを助けるにはこれに勝てばいい…そうだよね〉

〈ボクはあいつと友達になりたいんだ…〉

〈魔法世界の崩壊を止めるプランがボクにはある！〉

〈この一年間、いろんなことがありましたね…〉

〈あちらでも…元気に過ごしてください…〉

？

麻帆良学園女子中等部エリア 女子寮

「……今の夢は、いつたい……」

朝 日が昇り始める頃

不思議な夢を見た瑞樹は少し考え事をしながら布団から出る

「考えても無駄か……。夢の内容は殆ど覚えてないし……」

ただ、Fが居た……。私と会ったばかりの頃の顔つきで、少年と対峙していた。あの夢は私の存在しない世界の……。

ばかばかしい、そんな世界があっても私は現にここにいる。それもただの夢、気にすることなど何もないじゃない。」

そう呟いた瑞樹は道着に着替え朝練の準備をした後部屋を出る。

「ふっ、ふっ、ふっ」

この生活にも慣れてきた、練習量も昔より多いしまた質を上げていくのかな。

そういえば、今日からだったかな、新しい先生が来るのは…。多分和美さんがまたトトカルチョでもやってるだろうし子供先生に賭けてみよう。夢の内容だつてそれで本当か確認できるはずだし。

朝の鍛錬を終えた瑞樹は部屋に戻り朝ごはんの支度を始め、もうそろそろ出来る上がる頃同じ寮に住む長谷川千雨が起きてきた。

「…おはよう、ミズキ。」

「おはよう、千雨さん。昨日は遅くまで何やってたの?」

「お前と配信した後はネットゲームをしてたんだ、あんまりログインしてないけどな。」

「学校生活に無理のないようにね、趣味だから特に言わないけど。」

二人で食事をとったあとは学校の支度をし、三十分の余裕を持って寮を出て学校へと向かう。

「おはようございます。和美さんいますか?」

「はいはい、ご指名ありがとうございます。それで、どうしたの?」

「いえ、和美さんの事ですから今日来る新しい先生のトトカルチョでもしてるのではないかと思いましたが。」

「おい、そんな理由でいつもより早く来たのか?もう少しゆっくりしたかったんだが?」

「千雨さんも賭けてみる?いつも傍観ばかりでしょ。参加してみるのも仲良くなれると思うよ。地味で目立ってないんだから。」

「余計な御世話だ!」

瑞樹と千雨は傍目から見るといちやいちやしてるようにしか映らないことに気付かずじゃれ合っている。

「いちやいちやするのは良いけど余所でやんない?」

「してねーから!!」

「すみません、それでやっていますか?」

「うん、やってるよ。倍率は51以上が3、41から50が2、31から40が2、5、20から30が3、20未満が5だよ」

「そうですね、桜子さんはどこに賭けてますか？彼女最近後が無さそうでしたが…」

「桜子？十口最高倍率に賭けていったよ。すごい顔で。」

「やっぱり、では私もそこにしようかな。和美さん、今のところ払い出しは何枚まで行けますか？」

「え？えーつと手持ちが三百ちよつとと最高倍率以外の収支になると350強だね。」

「じゃあ少し、無茶してみようかな。」

その言葉とともに出された食券の数に話を聞いていたクラスメイト達の目が点になる。

『……えっ？』

「最高倍率一点買い百口。良いですよ？上限はないのですから」

そう言って和美に十枚の束を十個手渡した

「ちよ…ちよつと待って。私、払い戻せるの350強って言ったよね？これ確実に超えるよね？」

「はい♪超えますね。」

「そこは70にしてくれるんじゃないの？」

「自信のある勝負にベットが小さいのは嫌いですから♪」

「もしあたった場合私払えないんだけど…」

「体でもいいですよ？その時は可愛がってあげます。」

「あ……いやあ…それはちよつと…」

「それでは頑張ってください、返済は今月まで待ちますから。」

「は、外れれば、問題、ないし…」

「ニコツ（外すかもでこんな大口賭けるわけないよね？私は和美さんの困ってる顔が見たいからこうやってるんだよ？ほら、一思いに体を差し出してみてくださいいよ、一晩200枚減でいいですから、ほら）」
「ほ、本日のベット終了。私は少し用事が出来たからちよつと出てくるね。それじゃ結果をお楽しみに」

そういうや否や教室からすごい勢いで飛び出していった。

「…どこにそんな枚数持ってたんだよ」

「ほら、少しづつかけてたじゃない？基本的に最高倍率しか賭けてこなかったからあれだけの枚数あったんだ、まだ53枚残ってるし。」

「当たっても使いきれないだろ？」

「もちろんこのクラスのみんなとJ O J O苑に行くに決まってるじゃない。全員分出してもまだ余るしね。」

『ミズキ（ちゃん） 大好きー!!』

「はっはっはー、良きに計らえー。」

キーンコーンカーンコーン

「あ、朝礼のチャイムだ。」

「アスナと木乃香、朝倉がまだ戻ってないよ？」

「先生来たらヤバいんじゃない？」

ガラッ

「あーっもう！ひどい目にあつたじゃない！」

「まあまあ、明日菜。小さい子なんやから許してあげな、いかんえ」

「そうは言うけど…あたしガキは嫌いなものよ…。」

話に上がったアスナと木乃香が教室に入ってきた。

「おはよう、姉さん。今日も遅かったね。寝坊じゃないみたいだけど」

「あ、ミズキ、おはよ。そうだ聞いてよ！今日来る途中変なガキにドギツイ失恋の相が出てるって言われたのよ!?!失礼でしょう!?!」

「え？あく、ゴメン。ノーコメントで。」

「え!?!ミズキもそう言うの!?!」

「私も軽い占いは出来るけど…ちよつと結果は言えないかなあ…」

「その言葉が結果を物語ってるって気づきなさいよ!!」

「じゃあ、正直に全部言っつていいの？」

「え?...あ、うん」

「恋愛面としては絶望的だね、今まで見たことがないくらいに。あちらがたは姉さんの事は女の子というより娘や親友の大切な人みたいな見方してるから期待しないで別の人に切り替えた方がお得だね。オススメはダンディな人より同年代から年下のほうがイイかも。それに姉さんは引つ張られるより引つ張るタイプだと思われるから奥

手な人のほうが恋愛には向いてると思うよ。結論タカミチさんは諦めなさい。」

「ぐはあっ!!」

「…言いづらい事ずば言うんやなあ、瑞樹は…」

「気を使っても姉さんの為にならないからね。」

アスナを一刀両断した瑞樹はケロつとした顔で言葉を零したあとこそつと和美は席に着いていた。

「あ、超さん。肉まん売ってますか？」

「おー、ミズキ。売てるネ。いくつ買う力？」

「三つでお願いします。」

「あいあい、わかたヨ」

超さんから買った肉まんを高速で消化しているとチャイムがまた鳴り、朝礼開始の合図とともに全員が席に着く。そして扉に近づく気配が二つ。

ガラッ

(あれ?そういうえば鳴滝姉妹がトラップしかけてなかったかな?子供先生だった場合気づくかどうかも怪しい…間に合え!?)

トラップの存在に気付いた瑞樹は持っていたペンを高速で投げ、ベツタバタな黒板消しトラップを未然に防ぐ。そうすることによって魔法使いが普段使っている障壁の存在を思い出させ、魔法のない場所の自覚を持ってもらいたかった。

結果が功を奏したのか障壁の気配は消え、その後のトラップは全てかかってくれた。

(これで魔法の存在は気づかれないだろう。気が気じゃないよ、まったく…)

かかったトラップの主を見つけたクラスメイト達は一斉に黄色い声を上げた

『きゃー、可愛い!!!』

そんな中ちらりと瑞樹が和美を見やると顔面蒼白にしながら遠くを見つめているのを確認しつつ誰にも聞き取れないほどの小さな声を呟く

「このクラスはこれがデフォルトだから早く慣れなさい。私も長く時間がかかったから。」

そう小さく零すころには明日菜と委員長のキャットファイトが始まりいつも通りの空気へと持ち込まれた。

「今回はここまでみたいなの空気出してないで止めてこい。ガチユリクソビッチ」

「そこまでいう!? ひどくない!? まだ実害出してないはずなんだけど!!?」

「まだとか言ってる時点で終わりなのを気づけ、バカ」

「ちえー。行ってきまーす」

重い足取りで教卓の前まで行き、瑞樹は問題児二人に話しかけた。

「はあい、お二人さん。いい加減にしないと先生にあることないこと吹き込んで外に出られなくしてあげるよ。」

「っ!!! はい。」

「お待たせしました。お話の続きをどうぞ。」

しようもない喧嘩を止めるのは日常茶飯事となってしまうたのか

二人はピタリとケンカをやめ、おとなしく席に着いた

「あ、ありがとうございます。えっと…風鳴さん」

「はい。」

似たようなことがあったら呼んでくださいね。止めに来ますから。」

そう言って席まで帰るミズキに周りが茶化し始めたがノリ良く返して着席した。

「初めまして、このクラスで英語を担当することになりましたネギ・スプリングフィールドです。よろしく願います。」

そうして自己紹介やその他が終わり通常授業に戻って行った。

「やっぱり、これから波乱が待ち受けるのだろうか……。……。
そしたらまた会えるかな。夢に見たあの子になって……。だってあ
の子はFの記憶や経験を継いでるみたいだね……。」

8時間目「露見」

今日の授業も終わり千雨さんと変える支度をしているとき和美さんが近づいてきた。

「あ、瑞樹。食券なんだけど今週中には渡すから、ちよつとまってる」「いえいえ、払えないことを分かってやってるのですから構いませんよ。」

それより、もつと困った顔してくださいよ。困った顔が一番ふぎや!?!」

「それ以上喋るんじゃないやねえガチユリクソビッチ。」

「何気にその言葉気に入ってる？千雨さん」

女の子にあるまじき顔をしていると後ろから殴られた瑞樹は殴ってきた千雨にジト目で見返しながら呟いた

「それと、今日先生の歓迎会するんだけど瑞樹さ、明日菜と一緒に買い出しと先生呼んできてくれない？長谷川さんは飾りつけを手伝ってほしいし。」

「姉さんど？良いけど姉さん買い物リスト渡してる？覚えきれてないんじゃない？」

「なんで私まで参加する流れになってるんだ!?!」

「さすがの明日菜でもそれくらい覚えられるんじゃない？」

「まあその点は私が行けば済むことなのでおいておいて。千雨さん参加しないのですか？」

「するか!!あんな連中とずっといると体力もたねえよ」

あまり大きな声を出さずに怒鳴るという器用なことをする千雨さんに感心しながら今日の配信の事を隠しながら伝える。

「そっか、わかったよ。今日は私は参加しない方向で説明してて。」

「了解。気い付けろよ。」

そう言葉を残して千雨さんは寮へと帰って行った。

「長谷川さん、何か用事でもあったの？」

「うーん…。一応私もあるにはあるけど別に今日じゃなくてもいいものだから。今回はこっちに混ざるよ。子供先生は不安だしね。」

「にやるほど、子供先生に気があるのかなあ？」

「馬鹿言ってるよと襲っちゃうぞ♪」

子供先生の事で茶化してくる和美さんに冗談交じりにすり寄ると本気で避けられ五メートルほど距離が空いた。

「……避けすぎじゃない？さすがに傷つくよ？」

「あんたの冗談はホントにされそうだから！避けるに決まってるでしょ!!」

「身から出た錆とは正にこのことか……」

まあ、買い出しの件、了解しました。向かってるだろう姉さんと合流するからリスト頂戴な」

「あぁごめんごめん。はいこれ。かなりの量買って大丈夫だけど領収はしつかりもらってきてね。私がまとめてみんなから徴収するから。」

「了解。じゃあ飾りつけよろしくね。」

和美さんからリストをもらって先に行ったであろう姉さんを追いかけるため小走りで校外にある小売店へ急いだ。

「いやー、意外と量があるね。姉さん」

「ホントよ、まったく……。体力に自信のある私たちだからいいけど、本屋ちゃんとかだったら階段とかでこけて大怪我するわよ」

私たちは校舎の近くにある中庭を通るために中央広場に来ていた。買い物も無事に終わり、物を運んだあとは先生を呼びに行くだけである。

「それにしても、やっぱり姉さん、リストの中身忘れてたね。」

「しようがないじゃない、種類も量も多かったんだから！」

「私はすぐに覚えられたよ。もう……そんなんじや高畑先生に嫌われるよ……」

「ええ!!そんなの駄目よー!」

「当たり前でしょ?テストの成績も悪いし物覚えも悪い。おまけに短絡的で短気で……。嫌われる要素しかないんじゃない?」

「うぐっ…確かに…。っていうかミズキ、高畑先生との恋は絶望的って言ってなかった?」

「そうだけど、譲る気がないのに諦めろの一点張りじゃ気分はよくないでしょ?直せるところは全部直して努力して頑張っつて、それでも駄目じゃないと諦めつかない。姉さんはそんな人だから。」

努力の方向性と直す場所の指摘。そうゆうサポートをするのも妹であり、友達である私の役目なんじゃないかな?恋に関しては私のほうが先輩だしね♪」

「ミズキ……。」

「差し当たって…まずは英語の勉強から始めようか。」

「……えっ?」

「そうだね、目標は80点越えだね」

「いやいやいや、ミズキ?」

「英語で80点越えてから高畑先生のところに行っつて

『高畑先生!見てください、今度のテストこんなに頑張りました!高畑先生に褒められたくて頑張っつたんです。だから褒めてくださりませんか?』

とここのういの。」

「無理無理無理!そんなの出来る訳ないじゃない!!」

「何事もチャレンジです。幸いこのクラスには超さんをはじめ学年トップクラスが多数在籍してますから。私も含めてね。」

「いやよ!それに出来る訳ないでしょう!!?」

「考えてみてください。」

「何よ」

「もし姉さんが80点取っつたとして、先生にさっきの言葉を言えたとして、バカレンジャーを大切にしていた高畑先生がにべもない態度をとると思いますか?むしろ

『僕に褒められるためにつつていうのがただけじゃないけどこんなに頑張っつたんだ褒めるくらいはしてあげないとね』

とか何とか言っつて頭を撫でてくれたり何処かに外食に連れて行っつてくれたりするかもしれないよ」

「…してくれそうね、ていうかしてほしい。」

「でしよう!? だったら一度頑張ってみましよう? やらずに諦めるよりもやって駄目かを確認してからでよくない? 姉さんは成績が悪くても頭は悪くないんだし」

「…そうね。やる前から諦めてたら何もできないもんね。うん、頑張ってみるわ。その代り、ミズキに相当頼るからね」

「任せてよ。私も勉強には五年しか使ってないから姉さんの方がアドバンテージあるからすぐだよ。」

「よーし、やるわよお!…あれ? あの小さいのガキンチョじゃない?」

「そこはせめて先生って言ってあげなよ…、でもそうだね。それに階段から大量の本を抱えてる宮崎さんが…。嫌な予感がする、姉さんこれ持つてて!!」

「あ、ちよ、ミズキ!」

そう言っ駆け出してすぐに段差で足を踏み外した宮崎さんが宙に投げ出された。

ネギ先生もそれに気付いたのか背中杖を構え何らかの魔法を発動しようとしている。

(いやいやいやちよっと待て!! せっかく魔法の秘匿に助力したのになんところで使おうとしないですよ! 少しは考えて行動を…した結果が魔法を使っ助ける。何だろうな…はあ…)

宮崎さんが地面に落ちそうなところでふわりと一瞬停滞した。

その隙に私が間に合っ無事にキャッチ。宮崎さんに怪我がなくてよかつた良かった。で終わらないのが現実だよね。

「あ…、あんだ…」

「あ…いや…あの…その…」

「姉さん」

「う…風鳴さん…?」

「あんだ!」

「ストップ!!!」

姉さんが先生を掴んだところで私の声が響く。

「宮崎さん、ネギ先生が階段から落ちたあなたを助けてくれました。」

「そうなんですか…あ、ありがとうございます、ネギ先生。」

「い、いえ。怪我がなくてよかったです。次からは気を付けてください。」

「は、はい。失礼します。」

そう言つて宮崎さんは散らばった本を片づけ去つて行つた。

残されたのは涙目になっているネギ先生とネギ先生を睨み付ける姉さんと沈黙する私

「とりあえず、場所を移しましょう。」

中央広場に脇にある林の中で三人で顔を突き合わせる。

「さて、説明してもらおうわよ。」

「はい、でも姉さん。先にこれを言わせてください。」

「何よ」

説明を求める姉さんに私は説明するために必要な説明を始める。

「まず、今の姉さんには選択肢が3つあります。」

「はあ？説明を受ける意外になにがあるつていうのよ!？」

「1つ目、これは私が一番選んでほしい選択肢ですが。」

このまま、姉さんは何も見ていないことにして、荷物を持って教室に向かう。」

「そんなの出来るはずないでしょう!?!私は朝にも不思議な現象に巻き込まれたんだから!!」

「先生…」

「す、すみません…」

怒鳴つたように喰い気味に言葉をかぶせてきた姉さんをよそに不思議な現象の張本人をジト目で見やる。

「はあ。二つ目、説明を受けるがこのことに今後一切関わらないように努めて日常を謳歌する。」

「…話の内容にもよるわね」

「三つ目、出来ればこの選択肢を選んでほしくはないですが。」

「良いからさっさと言いなさいよ」

「三つ目、事情を聴きすべて受け入れたうえでこのことに関わり生き

ていく。これは大変危険で命に係わることもあります。」

「何よそれ。なんで今回の説明を受けるのにその選択肢が要るのよ？」

混乱したような声色でそれでも気丈に振る舞っている姉さんには説明したくはないけれど納得してくれないのだろうか…。

「この説明には必ず選んでいただきます。これは絶対に。私だつてこのことに関わっているから命の危険は両手の指で数えきれないほどありましたからね。」

「風鳴さん、何もこんな形で迫られても答えなんて出せる訳ないじゃないですか。せめて最低限の説明をしないと…。」

「いえ、必ず答えていただきます。質問は受け付けます。答えられるものに限りませんが全て正直に嘘偽りなく答えます。」

「…ホントよね？ だったら質問。ミズキが関わってるのはいつからで具体的にはどんな危険があったの？」

「私が関わったのは生まれてからです。どんな危険があったのかといえば兵器としてたくさんの人を殺すための道具として取り合われたし、壊されそうになりました。封印と言って巨大な棺に閉じ込められたし、最近ではここに来る前に殺し合いをしてましたよ。」

「二つつ?!?!?」

「たくさんの人を殺したし、たくさんの希望を打ち砕いてきました。ネギ先生、これはあなたにも言えることです。この力は人助けのため力だけじゃなく人を害するためにも働きます。努々忘れないでください。ほかに質問は？」

「な、なら、この選択肢の意味は何？」

「簡単ですよ。二度とあなたにこのことに関わってほしくないだけです。記憶喪失なのも好都合ですから。」

「…最後に私が関わった場合、どんな危険なことが起こるの？」

「…具体的なことは何もわかりません。けれど、わかっていることだけで述べるとするならば…」

「ほぼ確実にまず間違いないこの世の絶望を一身に引き受けたあなたと私の過去を追体験、もしくはさらに酷い事になって襲いかかるでしょう。」

「……………」

「ネギ先生、あなたはその絶望を打ち砕く希望となるように仕向けられていることを覚えておいてください。どんなに悪い事でも相手は同じ人間です。相手もやっていることを望んでいないのかもしれないし自分には自分の、相手には相手の正義があることを理解しておいてください。そしてこの修業期間中にでもあなたの目標を決めてください。この力で何を成し、どのような結末を経たいのかを。」

「……………はい。」

この力のあり方と自分自身のあり方に葛藤する様子を見せながらも力強く、しかしはつきりと頷いた。

「姉さん、もう一度聞きます。三つの選択肢のうち、どれを選びますか？」

「……………少し、考えさせて。そんなすぐには決められないもの。」

だから今回は何も聞かない。でも、いろんな質問はすると思う。「構いません。いっぱい聞いていっぱい悩んでください。その間は今の日常を楽しんで過ごしていきましよう。」

「わかったわ。…よし！悩み事終了。ついでだからガキ…いや、ネギ！…ついてきなさい。教室まで」

「え？あの、どういうことですか？それに名前も…」

「良いから。それに、あなたと一緒に部屋になるってことはいろんなことが起こるかもだから、何時までもガキンチョのままじゃいられないでしょ。どんな事情があるかは聞かないけど事情があるのはわかったんだしね。」

「明日菜さん…ありがとうございますー！」

「さ、いくわよ！ほらミズキも！」

「…まったく、強引なんですから…」

昔も今も引つ張って行ってくれるところは変わってない。

でも、それでも変わったのは新しい人格だからか、昔のことが心のどこかに住み着いているからか、悪い方に考えがいきそうになった時、思考を切り替えて明るい方向に持っていこうとする。

そんな雰囲気にかけて周りも明るくなる。

ほら、やっぱり。姉さんは奥手の人間のほうがイイよ。タカミチさんは引つ張る側だろうしその手は真っ赤な血に塗れていることだろう。そんなことが頭の片隅にあるからか幸せを掴もうとはしてないみたいだし…。

姉さんはその手を取って引つ張って幸せになってくださいっていうんだろうな。だって姉さんだもの。

自分を身代りに私を助けてくれた姉さんだもの。

わかるよ、例えば血は繋がって無くても二人で寄り添って生きてきたんだもの。

だからこそ、姉さんだけはあの世界の事は知らなくていい。

知らない方が幸せなんだから……………

9 時間目 「諦念」

ネギ先生の歓迎会も何事もなく終わりを迎え、新たな生活を迎えた。

そして、そんな生活の中でもやはり苦難は待ち受けているものでネギ先生の魔力暴発による被害は着々と増えていた。

それとは裏腹に現在進行形で無理難題に直面してしまっていた姉さん、そこ文法間違ってるよ。その文はするじゃなくてしている。現在進行形だからプレイじゃなくてプレイング。」

「あ、ホントだ。」

「そして、書き直しても単語間違えてる。playにはそのままingを付けてplayingだよ。」

「ううう。なんで英語ってこんなに面倒なのよ」

「英語より難しい日本語ができるんだから少し勉強するだけでしよう。」

簡単な英語の問題を作ってみたけど出来がそこそこひどい。ほとんどの問題を解けないなんて思っていなかった。

「さ、もう一枚やりましょう似たような問題にしているからさっきまでの解説を思い出しながら解けば出来るから。」

「はい…。」

10分後

「うん、さっきよりはよくなったね。」

「ホントに!?!」

「うん、全問題違ってるけど。」

「がくっ」

だったら良くなってなんか無いじゃないの!!」

「でも、今回の問題殆どがケアレスマミス。ちよつとした間違いなんだ。だからそこを徐々に直せば今回の一枚は完璧だね。」

それじゃあ解説するよ。解説ごとに同じものを解いてもらうか

ら。」

「はい…。」

「問」 He is playing tennis この文を日本語に直しなさい。

これはHeで男性用三人称、つまり「彼」になります。Isで接続詞、繋げる言葉なので今回は「は／わ」を使い、playingでさつき言った現在進行形だから「うしています。うしていますところ。」最後のtennisはそのままテニスを指しています。そして文法通りに直すと「彼はテニスをしているところす」になります。姉さんの答えは「テニスをしたのは彼」です。この答え方ももう少し変えれば正解です。

「したのは」ではなく「しているのは」に変えることですね。

姉さんの答えはIt is him who played tennisになります。

これだと過去形になってしまいます。今回の問題だと素直に答えていいです。」

姉さんの勉強を見始めて三日、ほとんど何も知識がない状態から中学二年に上がるための内容をしている。正直心が折れそうである。

「ね、ねえミズキ。少し休憩にしない？」

「…そうですね。では、休憩の後に解説の続きをしましょう。」

「うん、わかった。あと、聞きたいことがあるんだけど、あのことで。」

「わかりました。場所を移しましょう。木乃香さん、ネギ先生、少し夜風に打たれてきます。根を詰めすぎると捗らなさそうです。」

「わかったえ。戻ってきたら温かい物いれとくわあ。」

「ありがとうございます。」

行きましょう。と姉さんに声をかけて玄関を出る。目指す場所は人気のない場所。私が一晩泊まった管理人室だ。

扉を開けて中に入る。この間使った時から変わらない空間がそこにはある。今度掃除をしに来よう。

ベッドに二人で腰を掛けて座る。人ひとり分の間を開けて。

「さて聞きたいこととはなんでしようか」

この問いかけの時には私の意識のスイッチは武人としての自分に切り替える。こうでもしないと私の心が泣き叫ぶから

「うん。いろいろ考えたんだけど、やっぱり一番に聞くのはこれ。

私には戦う力はあるの？

二番目は私の過去。私の持っている記憶より前の事でミズキの知ってることが聞きたい。」

来た。話したくないことのツートップ。この二つは話してしまえば姉さんは確実に巻き込まれなくてはいけなくなる。

「姉さんには戦う力はないですし、私が知っている過去も姉さんに話したと思いますが？」

「戦う力がないのは半分本当、私の過去の事も上辺だけしか話してない。よね？」

「……………」

「私ね、最近よく記憶にないことを思い出したりするんだ。

今日なんか、私の本当の名前だなんて勘違いもした。ミズキが来てからもそうだけど、ネギが来てからは特に。」

「ッ!?!…」

「…………その顔、知ってるのね？私の本当の名前があれだって、知ってるんですよ!?!知らない大人たちに囲まれて保護されてる私を、知っているんですよ!?!私の本当の名前がッ!?!…………」

アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフィシアだって知っているんでしょ!?!…………」

(そこまで見ていたのかッ!?!)

顔を手で覆い、視界を一度クリアにする。

…もはや隠し事は出来ないみたいですね…

「…………はい。知っています。」

「っ!?!なら!!」

「教えてしまったては…………また、過去に囚われるじゃないですか。」

「…………え？」

「あなたにそれを言えば、私が一人でその名を背負うことに異議を示し、自分もと一緒に罪を背負うじゃないですか。」

私にはそれが耐えられなかった。

せつかく、都合よく過去の記憶を封印されているのに、私しか…その名を背負えるものが居なかったのに…」

「ミズキ…。」

「お話ししましょう。姉さんの過去を…私の知っている限り。」

私は決心するために座りなおした

「まず、大前提として、私と姉さんは血のつながった姉妹ではありません。」

「…はい？」

「私が姉さんの近くで見つかり偶々姉さんと似通った能力を有していることから姉さんは私を妹と勝手に言い始めました。私のほうが年上なのに」

「ここが私たちの始まりにして私の原点。私が私として何かしようと頭を使い始めるための。その前までの生活は秘密。」

「…マジか…」

「それが大体…4、50年前ですかね。詳しくは覚えてないですが」

「私たちっておばあちゃん!？」

「長命種です。寿命の長い種族なんです。今では人の年齢に例えると二十歳過ぎですかね。」

中学生らしき外見でも私たちは人とは違う。本来なら旧世界に居られないはずの体は世界が私たちの重要性を加味したのかいささか疑問だが体を構築できている。

「は、はは…」

「細かいところは省きますが、それから少しして私たちは悪い人たちに捕まります。」

「いきなりクライマックス!？」

姉さんがいた場所は隠れ家的な掘っ立て小屋のような場所だった。ほかには召使のような人が一人だけ。まあ、その人は殺されてしまったのだけれどそこは割愛。

「捕まえた目的は軍事利用。私たちの持つ力は攻撃力さえありません

がほぼすべての超常現象を防ぎます。いえ、無効化します。」

「何そのチート」

「この力を貯めて一気に解き放てば、魔力によって生命活動しているものなら殺せるほどに。」

「……」

「そして、それなりの時間が過ぎ、一度は助けられた私たちでしたがまた別の組織が私たちを捕らえました。私たちの力で世界を救おうとする組織に。」

ナギさんが私たちを枷から解き、外へと連れ出してくれた。その時は私たちは感情を抑制されていたからあまり覚えていない。

「…世界を救うのならないんじゃないの？」

「…たとえそれが人のいなくなる未来でも？」

「え？」

「すべての人間を夢の世界へと送り、人のいなくなった世界で『これ世界は救われたね』っていう連中よ、奴等は…。」

完全なる世界。私はどちらかというと彼らに賛成。私もこの世界が、旧世界も魔法世界も大好きだから。姉さんには内緒だけどね。私が逃げ出した理由は私ではだめだから。それだけ。

「そんなの救ってなんか無いじゃないの!？」

「救ってるでしょ？大地を環境汚染から。世界のあるがままを。」

「そんなの間違ってるわ！救う相手が違うじゃないの!」

「何も間違っていない。彼女は大好きなあの星を壊したくないから人を捨てたんだ。人よりも世界が大事なんだ。」

「そんなの!!「それに!」…」

「それに、奴等は既に負けている。現に私たちがここに居るのがその証拠。でしょう?」

「…そうね」

彼女を悪く言いたくはない。私にはその権利がない。

「奴等に捕まってからは別々の牢に入っていたから知らないけど計画の最終段階の時に私は姉さんに逃がしてもらって機械によって転移した後何処かを經由して山奥に放り出されたの。それが八年前。私

の知っている過去はここまでよ。」

「私が逃がして…だから教室のインタビューの時の言葉だったんだ。」
「うん。今度は私が助ける番だよ。だから、知らせたくなかったの。
知ってほしく…なかったの。昔の事を忘れているのなら、このまま
…平和な世界で…一生を過ごして欲しかった…。」

「ミズキ…ごめんね。でも、私は逃げたくない。私たちが私たちの
まま生きて行きたいから。」

「姉さん…。わかっている、分かっていた。この話をしたら尚更こっち
の世界に来るだろうことは。」

だからこそ、これからは姉さんを守らなければならぬし自衛の手
段も手に入れてもらおう。

「ありがとう、ミズキ。」

「礼はまだ早いよ。これから姉さんには身を守る術を手に入れてもら
うから。」

「??あ、無効化能力?」

「そう、便宜上マジックキャンセラーって呼んでるけどね。」

私はスパルタだからきついと思うけど頑張ってるね。応援はしない
けど。」

「アッハイ。」

さてと。これから忙しくなる。姉さんには四月までに完璧に仕上
げてもらうかね。

10時間目「勉強」

「姉さん、勉強はどう？ 進みました？」

お昼休み、図書室利用者が増え始めた頃

私はどうにかこうにか勉強が追い付き始めた姉さんの様子を見るため、机に近寄る

「あ、ミズキ。ちよつと聞いてほしいんだけど……。」

「？ 何かありましたか？ 不調？」

姉さんは顔を青くしたまま私に返事を返した。

「最近つて言うか、ミズキと話したあとくらいからなだけでさ、授業がすんわりわかるつて言うか、理解できるようになったつて言うか……そんな感じが続いててさ、良くないことの兆候なんじゃないかって少し不安になって来ててね……。」

「??? 詳しくわからないけど、理解する気も起きない授業だったのが頑張れば理解出来そうになったつてことですか？」

「そう！ それよ！ 急にそんな気がしてるから、良くないことなんじやって思っちゃつてて。」

「なるほど……。それつて単純に知識が付いたつて事じゃないのですか？」

「そうだと良いんだけど、急にでしょ？ そんなことつてあるかしら？」
ふむ？ 確かに言われてみれば、5回くらい同じ説明してやつとなのにいきなりとなると不自然ね。

何か切つ掛けでもあつたかな？

……記憶が戻り始めてるから……とか？ 記憶の封印による副作用で知識まで封じられていて、だから勉強してもなかなか覚えられない、覚えても思い出せない……と仮定した場合、私とネギ先生が来た事で封印が少し緩んだ。それで今まで覚えたこと、授業で習ったことも思い出せるようになって来た。と定義出来る。

となると今回は悪いことじゃない、かな。

「私の仮説で良ければ夜に話しましょうか？ 今はそのままで大丈夫と
思いますし」

「そうね、おねがいするわ。昔の事も少しずつ思い出せるようになったから不安なのよ」

「分かりました、それじゃあまた放課後に。私は千雨さんにご飯食べてきますから」

「うん、よろしくね。」

キーンコーンカーンコーン

「えーとみなさん！聞いてください！」

授業も終わり、ホームルームの時間。ネギ先生からお話が有るみたいね

「今日のHRは大勉強会にしたいと思います！ 次の期末テストはすぐそこまで迫ってきています。あのっそのっ・・・うちのクラスが最下位脱出しないと大変なことになるので、みなさん頑張つて勉強していきましょう！」

「ネギ先生、素晴らしい提案ですわ」

「はい、桜子さん」

「はい、桜子さん」

桜子さんが提案？稀に鋭い意見をいう桜子さんならまともな意見が

「では！英単語野球拳が良いと思います！」

・・・やきゆうけんってなに？英単語を使った遊びなのは何となくわかるけど・・・何？

答えが出ないまま考えているとネギ先生が答えるみたい

「じゃあ、それでいきましよう！」

「え!? ちよ、ネギ!? あんた絶対分かってな、コラ！聞け！ ミズキ止

めてー！」

「え？あ・・・どうぞ？」

「何ですよ!?まさかあんたも知らない訳じゃ・・・ちよつと！私はしないから離しなさいよ！あと！みんなが持つてるプラカードなら確り理解してるから!!私真ん中じゃ無いから!!聞きなさいよ!!!」

姉さんのあの嫌がり様、罰ゲームが有りそうね、あ、脱いだ。理解

「ハイハイストップストップ!! 人の事言えないけど余り人前で脱がないように! 自分の体に自信が有るなら文句は言いませんが」

取り合えず、肌着とスカートは皆着てるね。ならよし。

「てか姉さん正解してるのに何で脱いでるの? 見せたい派?」

「んなわけあるか! 私が答える前から脱がしに来てんのよ!!」

「はああ・・・注目!!」

私の一喝で全員の視線を集めた、ビツクリしてる先生の視線も一緒に

「あなたたちが勉強をしなくてふざけてるのはよーろーろく分かりました。然し、ネギ先生はこう言いましたね? 大変なことになると。勝手な推測ですが、それは先生が教師として正式に採用されなくなる、とかじゃ無いですか?」

「え!?! いや、そんなことは・・・」

「当たってるみたいですよ??!! 皆さん」

「「「「「えええーろーろーろー」」」」」

「あううう・・・」

「はあ、皆さん、良い機会ですから伝えておきますが、この学園のエスカレーター式の進学は卒業する見込みのある生徒にのみ適用されません。義務教育の中学3年まではこのままで良いかもしれませんが高校生になるにはそれなりの成績と授業態度が要求されます。高校生は義務では有りませんから当然留年や退学があります。このクラスの大半は留年でしようね。このままでは」

「「「「「・・・」」」」」

うわあ、お通夜みたいになってる・・・

「さて、現状を理解できた方から席について勉強しましょう。超さん、葉加瀬さん、あやかさん、宮崎さんはこちらに来てください。少し話し合いますよ。」

皆無言で席に付いてる、理解できたみたいですね。

「それで、どうかなさいましたか? 風鳴さん」

「あの、なんでわたしまで、よ、呼ばれたんですか・・・?」

「はい、ここに集まって貰ったのはクラスのTOP5です。得意科目

を共有して皆を引っ張っていきましょう。でなければ終わりません。英語はネギ先生にやってもらおうようにして、残りの国語、数学、理科、社会をバカレンジャー以外に教えてください」

「4教科と言う事は、ミズキはどするネ?」

「バカレンジャーに全教科叩き込みます。姉さんに教えてるからコツは分かっていますので」

「それは頼もしいですねえ、理解してない人に教えるのは難しいですから」

「それでは皆さん、頼みます」

さてと、叩き込んでいきますか・・・面倒だけど

あ、そう言えば魔法の本がどうか噂が会ったような・・・

「成績下位組に言っておきますが、今噂になってる、魔法の本がどうのって噂、信じてる人居たら考えを改めて下さいね。それは思い込みによって記憶領域から知識を引き出しやすくなってるだけでその知識がなかったらトイレの役にしか立ちませんから。」

「「「「「ブフツ!!」」」」」ミズキさん!」」」」」

「わかったらさっさとやる!上位5人と先生で教えていくから、それとバカレンジャーは此方!全教科叩き込むから!!」

「「「「「はーい」」」」」

そんなこんなでテストは無事に終わりました。え?結果?クラス平均83点で堂々の1位ですけど?食券?3000枚越えました。

11時間目「鍛練」

期末テストも終わり2年生も残りわずかになった頃

放課後 女子寮の近くにポツンと佇む桜の下

私と姉さんは木刀を握り素振りしていた

「剣の鍛練はどうですか？慣れてきましたか？」

「バカ言わないでよ。まだ一ヶ月も経って無いのよ？慣れる訳無いじゃない」

「それでも、元々体を動かすのは得意みたいですね、お姫様の時はそれでも無かったんですよ？」

「うそでしょ!?!私の覚えてる限りだと最初から出来てたわよ、覚えられなかったけど・・・」

素振りはただの練習として体を動かすための基礎作り。色々ハイスペックみたいだけどやはり一般人より少し動ける程度。

振れなくなるギリギリまでやってから本番。

「じゃあ、今日はこのくらいにして、能力強化していきましょう。」

「ふう・・・わかった。今のところ認識出来て動かすところまで行ったら今日はどうするの？」

「一歩進んで、能力の強度の確認と纏うところまで行きましょう」

「まとう？」

「はい、胸のうちにある力を体全体に行き渡らせます。それだけで消す強さが跳上がりますから。」

実際に試してみましよう。・・・これにそのまま触れて下さい」

そういつて私は気で作った球体を手の上に作り出し姉さんに差し出す。」

「これは？」

「能力効果範囲にある物質、気弾、遠当てと呼ばれるものです。姉さんが触れると弾けるように消えるはずですよ」

そう言った私を怪しむように視線を寄越しつつ、指先で触れた

「・・・全然消えないんですけど。嘘吐いてるんじゃないの？」

「怪しんでるからでしょう？その能力は能力者が意識しないと害の有

るものしか無効化しません。でないと治癒が受けられないでしょう？

「さあ、拒絶するように意識してください。口に出すのもアリですよ？」

「……拒絶？……む!?……無効化！ ツ!! キヤア!!?」

パアンと風船が割れるような音が鳴りましたね、と言うか……

「なんで拒絶で割れないんですか……?意味わかります?この間問題に出しましたよ?」

「ううううっさい!分かってるわよ!断ること!嫌だといって受け付けないことでしょう!?こんな小さい玉に触って何を断れば良いのよ!」

「はぁ……今自分で言ったじゃないですか。受け付けないこと。私たちは受け付けようとしなければ魔法の大半を受けません。例えば見えていなくても害のあるものは受け付けません。見えているのなら尚更に!何回も同じ説明させないで下さい。4回めですよ?」

「うっ!……悪かったわね、覚えが悪くて。」

「それはもう諦めました。封印がもう少し緩むのを気長に待ちます。それで、成功しましたが何か感想とか有りますか?」

「そうね、思っていたよりもビックリした事かな?それで、能力を意識してやるとどうなるの?」

「さっきよりも強く破裂します。さ、試みましょう。昨日やったように胸の力を手まで移動させて下さい」

「うん、わかったわ。」

今度は目を瞑り静かに集中しながら右手を前に出す

「よし!行けるわよ!」

掛け声を聞いた私は先程と同じものを作り右手に触れさせた

バシイイン!!!

「キヤア!! なによこれ!全然違うじゃない!」

「言ったでしょう?跳上がるって、これを何時でも、瞬時に、長時間出来るようにこれからは訓練します。最低一時間は維持できるようにしましょう。それじゃあ、次は「コラああああ!!!何をしている!」ん

？」

少し遠くから生活指導教諭の新田先生が走ってきた

これって怒られたりするのかな？部活動に入っていないのに木刀持ってるし

「ゲツ 鬼の新田じゃん・・・最悪」

「どうも、新田先生。こんにちは。どうかしましたか？」

「君たちはA組の神楽坂さんと風鳴さんか、こんなところで木刀を持って何をしているのかね？」

「はい、私たちは護身術の一つとして木刀で素振りをしていました。女ですから痴漢や暴漢が怖いですし、一つの運動としても行っていることです。何か悪いところがありましたか？」

「ああ、そうか君は年末に転校してきたばかりか。麻帆良学園生は基本的に部活動生以外の木刀や弓等の危険物は持ち歩いてはいけないんだ。だから、今みたいに体を動かしたいなら部活動に参加してそれぞれにあった場所で行いなさい。今回は優等生であり転校して時間も経ってない君だから不問にするが、次からは確りと処分を下すからな。」

「確認不足で申し訳ありません。お手数をお掛けしました。次からは部活動に参加してからさせていただきます。ご指導ありがとうございます。」

「うむ。わかれば良いんだ。生徒皆が君のように一度の注意でわかってくれれば良いのだが・・・」

「ありがとうございます。では、寮に帰らせていただきます。失礼します。」

「し、失礼します」

「うむ、ここから近いとはいえ気を付けて帰りなさい。」

「・・・新田先生に背を向け歩きだし、会話が聞こえないだろう位置まで来て私は口を開く

「そう言う規則があるんなら教えておいて欲しかったんですが？」

「しよ、仕様が無いでしょ、私も知らなかったのよ！」

「はあ、練習場所無くなりましたね。」

「そうね、能力は室内で出来るからまだマシだけど剣術がね・・・」
小声で二人して早口で現状の確認を済ましたところで今後をどうするかと言う問題にぶち当たる。

お互いそれ以降喋らず寮の入り口にたどり着いた

「部活に参加か、武道系の部活は参加したくないんですよねえ・・・」
「あれ、てつきり剣道部に参加させてもらうのかと思ってた。武道の何がダメなの？」

「ダメじゃないです。ただ、私の剣と彼らの剣が相容れないだけです。
剣道とは元より剣を振るために体を鍛え、技を磨き、心を沈める。
文字通り『剣を振るための道』を指します。

それに引き換え私の剣は剣術です。『剣を以て相手を制す術』を磨く。それ以上でもそれ以下でも有りません」

「うううくん・・・こんがらがってきたわ」

「簡単に言うなら相手と高め合う剣道と相手を殺す剣術。大雑把ですがそう言う認識で良いかと」

「なるほどね。何となくわかったわ。それじゃどうするの？部活でも作る気？」

「作る？そうか、その手があったか！」

「え？なにになに？どうするの？」

「そうだ、剣道に所属しないなら作るしかない。でも、部活は2000近くあったはず。内訳は詳しくないけど剣術部とかあるなら少し気にな・・・いや、刹那さんが所属して無い時点でお察しか・・・、なら取り合えず情報収集しなくちゃ、序でに強者の情報も知りたいかな、こっちに來てから自己鍛練しかしてないから鈍ってるかもしれないし・・・よし！」

「姉さん！」

「きやあ！ビックリした・・・何？」

「和美さんってたくさん情報持ってたりますか？」

「はっ?」

取り合えずの目標は

・部活動の建設

・麻帆良学園内での強者と試合

これを達成出来るようにしていくために先ずは情報屋を探さな
きゃ！

12時間目「部活」

新田先生から注意を受けた翌日 昼休み

「か〜ずみさ〜ん♪」

「ゲ、瑞樹じゃん。今はトトカルチョやってないよ？」

私は麻帆良のパパランチの異名を持つ和美さんを訪ねた。勿論沢山の情報を持つててクラスメイトだから。

「違う違う、和美さん単体で、お話が有ってね。時間大丈夫？」

「ありや、そうなの。オーケー、今日は何にも予定無いし」

「ありがとう、それで話し何だけど……情報屋って和美さんやってない？」

「あー、オーケー。取り合えず着いてきて。」

そう言うのと教室を足早に去っていく。意味を理解し私も後を追いかける。

予想の中で探す手間が省けた

和美さんの後を追うと放送室にたどり着いた。

「さって。瑞樹ちゃんはどんな情報が欲しいわけ？」

「そう身構えなくても良いよ。大したことじゃないから、相場はどのくらい？」

「基本的には食券で取引してるからそう身構えなくていいよ。それに、売る情報によって値段が変わるから。理解しててね」

「分かりました、それじゃあまずは和美さんの身体情報全部ください。」

「非売情報です。他を当たってください」

冗談から入ると即答された。

「冗談は置いておいて、部活動関連の事を聞きたくてね。大丈夫？」

「なるほど、基本的には大丈夫。ホントに極秘の事以外はちゃんと調べてるよ」

「だったら部活動の新規立ち上げに必要な事を教えて」

「斜め下から来たね、自分で調べた方が良い気がするけど。その情報は食券一枚、瑞樹ちゃんには関係ないか、3000枚超持ってたよね

？」

「はい、最近専用のケースを作りましたよ。はいこれ」

「まいどありー!と言っても、書類を複数枚渡すだけだから楽できるよ。はいこれ。部活動設立嘆願書と入部届け。それと危険物持ち込み願い届け。何部を作るのかわからないけど、危険物を持ち歩くタイプの部活動は届け出ないと注意の対象だから。剣道とか弓道とかの武器系ね。提出してみないことには許可が出るか分からないから予め先生に聞くのも有りよ。」

と、こんなところかな」

「ありがとう、意外と分かりやすかったよ」

「意外とは失礼ね!今は情報売ってるんだから当たり前じゃん!」

「あはは、そうだった。次なんだけど、剣系の部活って剣道部以外に有るの?」

「いいや、なかったはず。昨日今日で新設されてない限りね。この情報は価値は無いから気にしなくていいよ」

「ありがとう、次は麻帆良でトップ10に入る腕つぶしの強い人を教えて」

「トップ10か・・・15枚かな。下3人には口止め料で二枚ずつだから倍もらうし、7人分で3枚」

「なるほどね、はいこれ。口止め料で貰ってるのに情報売るんだね・・・」

「確認完了。口止め料は言わば値段のつり上げ、二枚貰えば4枚から、これは半年単位で貰ってるよ。瑞樹ちゃんも払っとく?」

「そうですね、では私に関する情報全てを止めてください。つり上げ枚数は任意ですか?」

「そうだよ、私たちは担保として先に貰っておく。半年までにその情報が買われたら担保を返却する。買われなければ私たちが仕事量として徴収する。だから瑞樹ちゃんが買った3人に担保を返しに放課後は走り回るかな。っとはいこれ、情報として紙に乗せておいたよ。顔写真付きだから分かりやすいでしょ?」

「ありがとう・・・あれ?クーへさんと長瀬さんだ。あの二人がトップ

争い？」

「そうそう。とは言っても、これは正式な野試合での戦績で勝率で出してる物だから確実にこの順番って訳じゃ無いんだ。%の高い上位10人で10戦以上戦ってる人が対象。二人は元々対戦数が極端に少ない方で70%くらい。そこから下は60から50%で対戦数は膨大。確実に強いはずよ？」

「ふむふむなるほど。剣道、空手、中武研、柔術、無所属、中武研、剣道、中武研。」

四天王と呼ばれるのは上位四人ってことか」

「なにになに？四天王が気になる？どんな武術か情報あるよ？一人辺り5枚で」

「あはは、気になるけど遠慮します。戦い方は戦いながら知りたいので。」

あ、私の口止め料は100枚で一年分お願いします。体格、武器、性格、その他もろもろそれで全部止めてください。それだけあれば止まるでしょう？」

「あ、あははは。口止めだけにそれだけ出すのは初だなく。オーケー、情報屋皆に通達しとく。」

「よろしくお願いしますね。では、私はこれで。知りたいことは知れたので」

「うん、分かった。私は情報の伝達とかすることあるからここにいますよ。それじゃまたあとで」

「はい。ありがとうございます」

そういつてから私は放送室を出る

部活を新しく作るのに五人か・・・私、姉さんの他名前だけでも貸してもらえるように色々回りますかね

side 朝倉和美

「はい、はい。そう言うことなので風鳴瑞樹の全情報は200枚からお願いしますね。はい、はい、はい。では、失礼します」

「はあく。瑞樹ちゃんの情報の値の上がり方がハンパないんですけど。」

麻帆良大図書館の地下と同じ値段はやりすぎな気がするんだけど。今度密着取材でもしてみようかな？何れくらいの強さなのか、武器は何なのか。

ただし、調べても誰にも売れない訳なんですけどね。はあく。

現金で換算したら50万弱をポンと渡すとか、一体どんな生活してたんだろ……。

超気になる……。根掘り葉掘り聞いてみようかな？でも、食券じゃ絶対に釣れないし……はあく」

s i d e o u t

13時間目「勧誘」

和美さんに情報を貰った放課後

私は刹那さんを訪ねた

「と言うわけで、剣道部の練習場まで連れて行ってくれない?」

「何がと言うわけなのでしょう? 開口一番に言われても困るのですが?」

「あ、やっぱり?」

冗談を言ったら本気の声で返事をされた。そんなだから・・・そんななんですよ?」

「簡単に言うと、私が新しく部活を作ります。そこに刹那さんを引き込みたい。でも剣道部所属だけどどうしよう?。そうだ! 殴って言うこと聞かせよう! ↑今ここ」

「何て野蛮人な発想ですか!? スパアンツ!!」

「痛い!? そのハリセンどっから出したの!?

まあそう言うわけでして。案内して?」

少し小首を傾げながら努めて可愛くウインク

「先ずは私に許可を得るのが先では無いでしょうか? 入ることが決まってる見たいに言いますが私は入りませんよ」

「えっ? それじゃ練習は剣道部の格下だけでいいんですか?」

「ツ!! 元より私にはその様な時間が有りませんから、それで構いません」

「そっか、わかりました。諦めます。」

じゃあ姉さんに頼んでこのかささんに入ってもらえるように頼んでくるので。では」

「やはりもう少し話を積みましようええそうしましょう。お嬢様に入って頂く必要は有りません、それにこちら側を見せる必要も有りません。ですから私ともう少し内容を詰めて行きましよう!!」

一息で言い切った刹那さんは私と顔が引っ付くくらい詰め寄りながら有無を言わさぬ形相で睨み付けてきた

「.....顔怖いよ?」

「お嬢様を巻き込もうとする人を止めないと行けませんから！」

「刹那さん冗談嫌い？」

「大嫌いです!!」

「アツハイ」

そんなこんなが有りつつも最終的に刹那さんは参加する方向で決まった。

そして……

「はい！やって来ました剣道場！いやあくむさ苦しいですね！」

「一言余計です。」

「はい。と言うわけで……たのもくくく!!!」

ダアン!!と勢い良く扉を開き全員の視線を集める。その中に和美さんから貰った情報の顔が居た。剣道部主将辻一さん。

その人の前まで堂々と歩いていく。勿論練習着で

「貴方が主将の辻先輩ですね？始めまして、桜咲さんのクラスメイトの風鳴と申します。」

「おう。で？なんの用があつて俺を訪ねてきたわけだ？」

「はい、貴方に賭け試合を申し込みます。」

「賭け試合？あんたが得るものは此処にはないと思うが？」

「桜咲さんの退部を認めていただくことと四天王の座を賭けて頂きたい」

「賭け試合つー事は此方にも何か利が有るってことか？」

「もちろん。私が負けた場合剣道部に入部した後奴隷にでもなりましょう。」

「……わかんねーな。明らかにこちらの方が好条件だ。それはつまり自信の現れてることだろ？万が一、億が一負けたときのリスクがデカ過ぎる。その二つは其ほどまでに欲しいもんなのか？」

「いえ、単純に賭けられる物を持ち合わせてないだけです。それに……たかが剣道家と戦ったところで苦戦するほど柔じゃない」

精一杯の皮肉とドヤ顔で主将を煽る、私

「テメエ、剣術家だな？良いだろう挑発に乗ってやる」

「……ありやりや、経験済みか。詰まんないの」

「いいからとつと構えろや！切られてえのか!？」

「何時でも結構！常在戦場ゆえ好きなようにかかってくるがいい、剣道家!!」

「ああそうかい、そんじゃあとつとくたばれ剣術家!!」

その声を引き金に一気に加速して私を一刀のもとに切り伏せようと木刀を振るう

「遅いですね。今の攻撃で三回切られてますよ?」

「ツ!? いつの間に後ろへ・・・」

いつの間にも何も振り下ろされたのを確認して半身で避けて二歩進んで振り返っただけ。たったのそれだけ。

「さて、私もそろそろ剣を構えますよ?覚悟は宜しいですか?」

「チツ 挑発するだけの實力は持つてるわけか・・・」

「今のうちに全力の一振りを出した方が良いですよ?全力を出したと言えるように」

そういつて腰に指してある木刀を完全に引き抜き右手でだらりと下げるように構える

「そうかよ。だったら確り目に焼き付けとけ！俺の『雲耀』を!!」

「示現流か、私も昔戦ったよ・・・。受けてたつ!」

私は木刀を下げた構えのまま辻先輩は自信の右耳に木刀を立てた構え。

十秒か、一分か、二人が静止したままにらみ合い遂に動いた!

僅かな重心移動、着地は正面。あの構えから考えうる最強最速の打ち込みは右の袈裟切り。つまりこの位置!

「キイエエーイーイ!!!」

「ハアツ!!」

ガキイ!!!

「・・・」

「ツツ???ありえねえ・・・」

辻先輩の振り下ろしの場所を完全に見切り、それに対し柄頭で打ち返す

怯んだ隙に左足で前蹴りを打ち距離を離す

「ぐっ！チツ!! 人間業じゃねえ。一体何しやがった!?!」

「失礼な、瞬動の入りで着地地点を読み切つてあの構えで出来る最速の振り下ろしの軌道を読んでそれを打ち返すように柄頭を打ち付けた。たったそれだけでしよう?」

「それが出来ねえからこんなに驚いてんだらうが!?!」

「第一、貴方の雲耀は完成してないじゃない。未完成の技で倒そうなんて片腹痛いわ」

「ッ!?!?そんな・・・はずは・・・」

「雲耀、忒の太刀要らず。そうね、本物を見たことがないのならあれで満足ね。構えなさい! 模倣とは言え本物に限りなく近い技を見せてあげる」

「クッ!!!」

辻先輩が構えるのを見て私は先の先輩と同じように構える

そして、持てる全ての気で存在を主張した

「!?!嘘だろ!?!」

そして、気をその場に残したまま瞬動で正面に行き振り下ろす

先輩の額すれすれでの寸止め

「四天王の称号と桜咲さんは私が貰っていきますね。面白い試合でした。是非、またやりましょう。失礼します」

刹那さんを連れて私は練習場を後にした

14時間目「入浴」

剣道場からの帰り道、刹那さんと並んで寮まで帰る途中

「今日はありがとうございました。色々付き合って貰ってしまつて」

「いえ、気にしないでください。剣道部に顔を出すよりも瑞樹さんと鍛練した方が私の成長にもなります」

「そう言つて貰えると助かります。後は二人集めなければ行けません。名前だけ貸してもらつたら宛はありますし、まあ何とかなるでしょう」

「宛が？長谷川さんは頼むと思いますが他には何方が？」

「このかさん」

「ッ!？」

「私としては護衛術の一環として参加して欲しいところですけどね」

「お嬢様は巻き込まないでください!!」

「私が巻き込む訳じゃ無いです。既に巻き込まれています。裏側から」

「ッそれをお護りするのが私の役目です！お嬢様にその様な事など・・・ッ!？」

刹那さんが言い切る前に私は腰に指していた木刀で刹那さんの首もとへ横薙ぎで寸止めする

「その有り様で誰かを護れるお心算で？」

「それは・・・」

木刀を腰に戻し刹那さんの正面で相対し、忠告する

「満足に自身すら守れない人間に誰かを護る資格など有りはしない。

あ、人ですら無かつたですかね？」

「ッ!!・・・何を言つて」

「純粋な人間とは違つて妖の気配が僅かにする。一般的な烏族とは違つている様ですが」

言い切つたと同時に刹那さんは私に斬り掛かつて来た。それを木刀で側面を叩き地面まで逸らし足で押さえつける。

「髪は地毛では有りませんね？瞳の色も良く見れば」

「黙れ!!!」

「……!!」。もうそろそろ分かるでしょう？今の貴方では私相手に一本取ることすら難しい事くらい。」

足を退けて1歩退る

「……」

「貴方にどんな理由があるのか知りませんが護衛を根本的に間違えて
いる」

「ッ！何を分かった口を！」

「ならば何故、貴方は今、この場所に居るのですか？」

「それは貴方が！」

「貴方が真に護衛足り得るのならばこの場に一人足りないのではない
でしょうか？」

「……あつ」

「影から見守り対象に気づかれず護衛するのなら片時も目を離しては
いけないでしょう。対象の隣に立ち、眼前で護るのならこの場所に対
象がいない。」

「……ッ!!」

「貴方が真に行くべきは隣に立ち護る事だった。何故なら既に対象に
は気づかれ突き放した結果悲しんでいるのですから」

「……それは……」

「ねえ、刹那さん」

呼び掛けると私は刹那さんの両肩に手を置く

「このかさんと親密になれとは言わない。友達になれとも言わない。
でも、隣に立たせて貰えとは言う。だって護衛対象と友達だったので
しょう？友達が急に遊んでくれない、話もしてくれないじゃ不安に
なってしまうじゃない。私がかしたのかな？悪いこと言ったのか
なって、本来しなくていい心配までかけて。そんな思いまでさせない
と護衛なんてしたくないの？」

「違うッ！私はお嬢様に心配掛けない様影から……」

「それが心配の元になってるって何故気づかないの!!」

「ッ!？」

「どんな過去があったのか私は知らないし知りたくも無いけど、貴方が抱えてる悩みを話して嫌うような人じゃ無いでしょう!？」

「それは・・・」

「話せばいいでしょ？伝えられないなら謝ればいい。でも、理由を説明する前から離れると、このかさんが辛いじゃない・・・。貴方がこのかさんを傷つけてどうするのよ」

「・・・申し訳・・・有りません・・・」

「なんで私に謝るの。謝る相手が違うでしょ？」

「・・・そうですね、ですが少し時間をください。今の私では・・・」

「・・・刹那さん、京都の出身でしたよね？元の方言はこのかさんと同じものですか？」

「え？あ、はい。小さい頃、一緒にいた頃は方言で話してました」

「だったら、このかさんと離すときは昔の話し方にした方が良いかもしれません。あくまでも、本心を語るのなら・・・ね?」

「・・・はい!」

「それじゃ私は少し寄る所があるから。また明日」

「はい、お疲れさまです」

そう挨拶を交わして刹那さんと別れた

「ち・・・あゝ、ただいま帰りました」

寮に帰ると張り紙が張ってあった。

「配信中」

「ちうさん、入っても宜しいですか？」

「はくい!そこでもちよゝつとだけ待って欲しいびよん!」

返事だけ返し玄関に引き返した2、3分待っているとリビングから千雨さんが出てきた

「ミズキちゃん、今日はお風呂でえ個人名をぜえつたたいに出さないで欲しいぴよん！ファンの皆にお礼の一環としてえミズキちゃんの入浴シーンを音声だけプレゼントしたいんだぴよん！いいかな？」

「ええ、構いません。映像でも全然構いませんが？」

「うんそれ垢BANしちゃう。と言うわけで気を付けるぴよん！」

あ、行っちゃった……。まあいいか、お風呂入る
部屋に付いてあるお風呂の脱衣所にタオルが有るのを確認してから服を脱ぐ

あ、キャップの付いたカメラがある、録音用か

「あ、このカメラで録音するんだ。マイクじゃなくて。キャップ外したら怒られるしちよつと注意しとこ」

カメラを端に寄せてから髪と体をしつかりと洗う

「どうか何で私の入浴シーンなんか録音するんだろ、ちうさんののも良いような気がするんだけどなあ、ちうさんのサイトなんだし。もしかして既にやってるとか？新鮮味が無いから私を使ったとか？：：寧ろ自分が嫌だったからとか。いや、邪推は止めよう」

体に付いた泡を洗い流し浴槽に入る

「ふう〜。やつぱりお風呂は良いねえ……。今のおっさん臭いとか言われそう。まあ母様も言ってたし、いいと言うことにしましょう。」

~~~~~♪~~~~~♪

~~~~~♪

よし、今日も喉の調子オツケー！さて、上がるとしますか。それでは皆さん、またお会いしましょう！」

そのまま風呂場を後にした